



うたそら

第
1
号

2021
March
3

参加者一覧	02
連作欄 8首の連作 自由詠	04
テーマ詠欄 「空」	41
短歌リレーコラム 「望遠鏡」	52
リレーエッセイ 「いちごいちえ」	54
次回予告・編集後記	55

うたそら 第1号

発行：2021.03.01

編集・制作：千原こはぎ

@kohagi_tw <http://kohagiuta.com>

次号予告

うたそら^{2号}

8首の連作自由詠

テーマ詠「緑」

短歌リレーコラム「望遠鏡」

リレーエッセイ「いちごいちえ」



短歌募集

投稿先等、
詳しくはうたそらの
ご案内ページを
ご覧ください



<http://kohagiuta.com/utasora/>

第2号 ^{〆切} 21 4/30 (金) 24時

•8首の連作自由詠 •テーマ詠「緑」1首

第3号 ^{〆切} 21 6/30 (水) 24時

•8首の連作自由詠 •テーマ詠「遊」1首

編集後記

このたびは短歌誌「うたそら」創刊号へのご参加、ありがとうございました。おかげさまで無事、発行まで辿り着くことができました。ご寄稿くださった皆さんに、心より感謝申し上げます。

第1号の参加歌人さまは211名、連作欄には148名、テーマ詠には187名のご投稿をいただきました。わたしが予想していたよりも多くたくさんの方に参加をいただき、嬉しいやら恐縮するやらですが、歌人の皆さんには新しい作品発表の場を提供でき、読者さまにはまだ知らない歌人さんのすてきな作品に出会える場となりましたら、これ以上の幸いはありません。

今回のテーマ詠のお題は「うたそら」にちなんで「空」。青空から雨空、星空など、短歌で描くことのできるさまざまな空をお楽しみいただけたらと思います。また、リレーコラムのトップバッターは牛隆佑さん、リレー エッセイは千原が担当しております。次の方へバトンをつないでいく読み物ページも、ぜひお楽しみに！

次号は4月末〆切の5月初旬発行、テーマ詠のお題は「緑」です。新緑の季節の始まり、皆さんの力作のご投稿をお待ちしております！

編集鳥 千原こはぎ

うたそら創刊号発行の記念として、
うたそら第1号ご投稿者様、読者様
のなかから抽選でそれぞれ

1名様へ、歌集をプレ
ゼントいたします。ふ
るってご応募ください。



歌集プレゼントの お知らせ

ちるとしふと
千原こはぎ

書肆侃侃房・新銘短歌シリーズ 39

それはやっぱりすきなのですか

新作を含め 350 首を収録
表紙・裏表紙・本文イラスト描き下ろし
監修・解説：加藤治郎

それぞれ
1名様

これはただの

千原こはぎ

この「好き」は甘くない。

恋の歌 344 首収録。

全ページフルカラー、
文庫サイズでお届けします。

解説：嶋田さくらこ
帯とコピー：田中ましろ



◆応募方法

歌集プレゼント応募フォーム

<https://forms.gle/4bPP2mNeFh1KQoTY7>
から必要項目を明記の上、ご応募ください。



◆〆切

3月31日(水) 24時

◆発表

ご本人へメール or DM
にてお知らせ

たくさんのご応募
おまちしております！

城山桜 @siro_saku14mv

水面狼 @wwolfater

鈴木 精良 @fufunag

鈴木智子 @cfun820_ts

鈴原ゆり @lily-5290

諏訪灯 @_skydew

セサミスペースM @sesamespace_m

千仗千紘 @Chihiro_Senjyo

蒼月まりか @sooduki_marika

草流 @kusa2619

蒼音 @chari433

たえなかすず @suzusuzu2009

高木一由 @ka_to_ka_zu

多香子

高階しうす @takashina_ak

たかはしりおこ @nashkrkr

瀧口美和 @abcdefgijklmiw

竹内亮 @takeuchiryo

武田ひか @sunamerinikki

竹林ミ來 @chik325

田中翠香 @suikakinenbi

田邊葉月 @hazuki1815

田斗 かき @herikutu_honpo

千束 @a_oneko

茅野 @white22autumn

千原こはぎ @kohagi_tw

chari @greenchari2

月岡鳥情 @ujou31

月丘ナイル @nyle_222

月硝子 @gesshodo

梅雨崎ナノカ @tsunayama_

天国ななお @momomiyam

道券はな @peter_pan_co

堂那灼風 @shakufur

遠山文 @sksk_tnk

domina @dominatanka

ともえ夕夏 @croissant Hey_Z

内藤絡 @1ndigo016
中村成志 @nakam8

夏本橙 @natsumototou

波よこに @urenensis_u

なるなる @narunaru0825

新妻ネトラ @NTR_s2s2

にう @yuru11ne1217han

西淳子 @Jacky244Ray

西村曜 @nsmrakira

ネコノカナ工 @nekonomanae_uta

根谷はやね @kaede9999

野添まゆ子 @kkjsk31

薄暑なつ @hakusho_

箱岡亮太 @UdoncNdesu

薄荷。 @aie0himeco

はばとび @veryblackcrow

濱松哲朗 @symphonycogito

春陽 @HARUHI_little_s

春ひより @akiyuzu0224

ひーろ @veryblackcrow

人々ひとり @hibinohomare

雛河 麦 @may_spica_358

piyomaru36 @piyomaru36

平井まどか @yokogumo3

笛地 静恵 @Ymcx6rhvEZgwq

福山桃歌 @peachsong_521

藤田美香 @w_isana

藤森岬 @xk5RX1A8F46kakn

ふうみうり @Am34Tt

古井久茂 @fulidom

細川エリカ @luvluvkasen

歩歩 @h_o_o_o_n

まきぞの @amaibiscuit_

まこ @maltase_cross

まさけ @mskpompompomfuwa23

真島朱火 @shuca_m

松本ユミ @yumi28282828

真野ありか @o_shironec
御糸さち @MEATsachi

三浦くもり @miurakumori

三浦なつ @natsumiuraok

みかこそま @hotarutonaru

深影コトハ @cotoha_mikage

みづき @hunnyhunter01

みそのみそ @mis0no

みてる @mittelfield

衣末 @mimi_4567

宮木水葉 @miyagi_mizuha

宮嶋いつく @miyazima_izq

虫武一俊 @mushitake

六厩めれう @mereumumai

村田一広 @mucci2018

八重森かもめ @lazybirdcage_t

八重森さくら。 @yaesaku0329h2

山上秋恵 @akiemuroran

山川仁帆 @masaho0102

山下桂子 @tsuno_kei

結川澄衣 @sui_musubu

遊糸 @yuushi_3

遊星 @yu_sei9

ゆりこ @b7282e_akaneiro

横雲 @yokogumo3

横浜かみ @nomikomiLAND

夜花 @yohana_no_sekai

夜夜中さりとて @yorusari

うま @llama Miyashita

龍翔 @oppizuntsuan

ルオ @ruo129

瑠璃紫 @ruri_murasaki

若枝あらう @WakaedaArrau

渡邊知博

和田晴美 @hrm143ponta

たくさんのご参加
ありがとうございます！ 計 211名



相河東 @aikawa_azuma
アオ @cocoaisgoo
青木夕海 @rim0910
青時 @madobenoumibe
青藤木葉 @konoha_ao
秋山生糸 @kiito25
麻数 @numberhemp
あさき まほろ @mahoro_sy
麻倉ゆえ @AsakuraYue
朝野陽々 @asanoyoyo
阿曾辺かぎろい @ai_2_siki
アダムス理恵 @adams_tanka
阿南周平 @scarecrow1409
あばがど @abggg_d
尼崎武 @amagatak
甘宮雨 @hiyo10673
天野うずめ @uzume_no_hijiri
雨虎俊寛 @amefurashi3107
新棚のい @hccmono
有村桔梗 @chattenoire_k
あるこじ @arukoji_tb
飯野太陽 @XftSh
五十子尚夏
石川順一 @Hitler57
泉 葉子 @yoko00022
isk @ks_i_sk
磯山武士 @takechan185
伊藤すみこ @110sumikodayo

伊藤佃	@ci07004116
魚住蓮奈	@hasnan_mhd
渦	@in_whirlpool
碓氷藍生	@aioicecream
宇祖田都子	@Shinnsyutu2020
梅鶲	@ume_dori
泳二	@Ejshimada
hs	@hswelt
aat	@electronic_melt
江口美由紀	@miyuki_eguchi
榎本ユミ	@enomotoyumi1007
衿足	@har_mare
えんどうけいこ	@clematisilica
おうい	@katsushika_oui
大甘	@kajin_OoAMa
大坪命樹	@OotsuboMeiju
大橋春人	@hachidx2
岡田奈紀佐	@spice16g
岡田濫	@kakomiyano
岡野伸吾	@okanoshingo
岡本雄矢	@yuyaokamoto0331
奥山いずみ	@botanbooks
小椋杏	@ogura_anne
尾崎ゆうこ	@2019Yukko
小澤ほのか	@honokaozawa
音無 早矢	@otonashi_haya
音平まど	@nandemonaihi16
おもち	@mechanobiru
貝澤駿一	@y_xy11
@kaizen_nagoya	@kaizen_nagoya
がね	@amicus08
カラスノ	@karasunosan
涸れ井戸	@kareido1111
川原まりも	@kg0058
神奈備夕凪	@kannaginavi
菊池洋勝	@kikutitc
きさうぎなる	@nr_ksrg
北の	@north0000kitano
北村美晴	@kame073
橋高なつめ	@coconutkikko
きつね	@001kitsune
木野葛紗	@blueregret
木村 権	@kimura_tanka
京野パンダ	@kehunopanda
去年	@kyonen1223
きょんひめ	@gyonhime2
工藤吉生	@mk7911
久保哲也	@qtetu
黒あげは。	@mariannu0721
黒須紗里菜	@tuki1226
くろだたけし	@tkuro2016
蛍と水脈	
こうげつしづり	@umisorayoru
香村かな	@komukana
小金森まき	@koganemorimaki
古閑弓子	@yumikokg
小泉夜雨	@kozumi_yau
御殿山みなみ	@lookat2
近藤あなた	@anata_tanka
坂本	@31mojija_taran
酒匂瑞貴	@sakawa_mi
さとうはな	@s_hana111
佐藤氷魚	@satohio_tanka
沙羅粗伊	@LT8MBfDEzeHLq2
汐射ハルカ	@haru_c17h17cl2n
紫苑	@purple_aster
詩季	@4kitanka55
鹿ヶ谷街庵	@ikasamabakuchi
シダタクマ	@s_i_d_a
島崎みとん	
嶋田さくうこ	@sakrako0304
西鎮	@xi_zhen_ivUT
雀來豆	@jacksbeans2
章生	@yaneura_neko

空を見るのが好きです。春の薄い空も、夏の深い青にむくむく湧く入道雲も、秋のどこまでも澄んだ高い空も、冬の白く静謐な空も、どの空も美しく清々として好きです。
今住んでいるところは高いビルもなく、顔を上げればどこまでも空が広がっていて、ぐんと大きく横切る飛行機雲や、一面のうろこ雲、二重にかかつた見事な半円の虹なんかもときおり見せてくれます。おかげでわたしのiPhoneには空の写真がたくさん入っていて、どの写真を見てもだいたいいつ頃撮ったものかがわかります。空を短歌に登場させるのも好きです。これまで詠んできた11200余首ほどの歌のなかで「空」の文字が出てくる歌を検索したら500首

新しい短歌誌を作りたいと思つたとき、その名前を考えるのにひどく苦戦しました。Twitterのアイコンのせいもあって、わたしには長年“鳥キャラ”が定着しています。開く歌会は「鳥歌会」だし定期発行のネットプリントは「とり文庫」といった具合です。今回もなにか鳥関係の言葉かな、と一瞬安易な考えが浮かんだけれど、すぐにそれはないな、と思い直しました。この短歌誌はわたし個人の本ではなく、たくさんの方と作り上げる場。短歌を始めたばかりの人もベテランの人もみんなを大きく広く自由に包み込んでくれるようなものがいい。そうしてそこでわたしも一緒に楽しく羽ばたかせてもらいたい——「うたそら」はそんな思いから出てきた誌名でした。けれど、すんなりとは決まりませんでした。わたしはこういうときに「空」という言葉を使うのがあまり好きではないからです。

不思議です。空が好きだし、空を短歌に詠み込めるも好きなのに、なぜ、誌名にするのはこの数なのではと思います。他にも「晴れ」「雲」「雨」「雪」など、空に関係する言葉を含めて探してみると合計で1000首を超えた。他の方の比率がわからないので比べようがないけれど、わたしにとって空はふと歌に入れたくなる身近な存在なのでしょう。

ほどのありました。もちろん「空」や「空き缶」なんかの文字列も含んでいるけれど、まあまあの数なのではと思います。他にも「晴れ」「雲」「雨」「雪」など、空に関係する言葉を含めて探し定期発行のネットプリントは「とり文庫」といった具合です。今回もなにか鳥関係の言葉かな、と一瞬安易な考えが浮かんだけれど、すぐにそれはないな、と思い直しました。この短歌誌はわたし個人の本ではなく、たくさんの方と作り上げる場。短歌を始めたばかりの人もベテランの人もみんなを大きく広く自由に包み込んでくれるような方がいい。そうしてそこでわたしも一緒に楽しく羽ばたかせてもらいたい——「うたそら」はそんな思いから出てきた誌名でした。けれど、すんなりとは決まりませんでした。わたしはこういうときに「空」という言葉を使うのがあまり好きではないからです。

そういうわけで、短歌誌「うたそら」は始まります。編集長ならぬ編集鳥として、空を見上げるようにふとしたときにぱらぱらと眺められて、晴れの日も雨の日も自由に短歌を楽しめる場になるよう、微力ながらがんばります。みなさま、どうぞよろしくお願いいたします。

千原こはぎ



1
いちごいちえ

リーエッセイ

前号の人の短歌から一語を摘んでそれをテーマにエッセイを書くページ
今号のテーマと書き手さんは…

空

テーマ 千原こはぎ

ここにあるかも分からぬ踏切の音が聞こえる日は目が冴える
何十も数えた羊を放り出しジッパー上げる寒空の下
いつもより妙に不気味な空間でいつもの氣だるさ振りまく店員
街灯と街灯の間の薄闇に潜む何かに振るレジ袋
私の根拠があるから飲むのですこの先科学立ち入り禁止
酒飲んだ夜中だからと言いながら通話ボタンを押しててウケる
夜明け頃同時に押した終了が寂しさつれてぽつぽつ歌う
時間警察睡眠課が来たみたい今日が休みで安心したよ

自分への慰労で蒸した承和色のバケツプリンをお皿に移す
ぐりとぐら一匹が焼いたカステラが食べたいとメモが紙の端に
こぐまちゃんのパンケーキを食べるため本屋の近いスーパー探す
大好きなアイスケーキを頬張る日 歌の期日で我が誕生日
あめちゃんと呼んだ自分が関西にしばらく居たと教えてくれた
子供らが神輿を取り巻き菓子貰う 私の町の謎な俗習
栗じやなくさつま芋だと知りつつもモンブランの黄を口に含む
喫茶店出てきたケーキは猫型で食べるに困りとりあえず撮る

菓子を齧つて

アオ

もうずっと君を待つてこの街の青を孕んだ夜は苦しい
眩しくて一瞬逸らした星がありそれからずっと見えないままだ
あまりにも似ていて遠くて戸惑った結果残った一つのボタン
卒業の日に渡されたお守りの意味が聞けずにまた春が来る
パンケースの端から色が落ちていて君から貰った青が足りない
三度目の海が欲しいよピンぼけのカメラロールに風は吹かない
バスに乗りこの歌を聞き確かめる記憶のランプがまだ光ること
幾度目の回想..澄んだ瞳と正しい背中優しい拒絕

イースターエッグ

秋山生糸

暗やみで体温計をくわえれば隕石の味 深くへ浮かぶ
幸福な人間なりの欠落へサプリメントをダンプしている
雪解けの後の汚れた街をゆく卵をひとつ懐に入れ
天使、鳥、優しい色を拒みつつ空を突き刺している針葉樹
春風に毛布 暖昧なままがいい 茄でた卵を見破らないで
道のない世界で探すたからもの楽しめてるならよかつたね
ほんとうのミモザがどんな香りかは知らないけれど おはよう おかげり
イースターエッグにきみが色を塗る思っていたより複雑な模様で

短歌の話に戻ります。僕はやっぱり冒頭の短歌は、いい歌だと思うのです。それも絶対的に。歌会には色々な側面があつて、その一つはプロフェッショナルな実験場というものが（特によく見知った者同士だと）なので、その観点でいくと、前述の通り当該歌が○点だったことは理解できます。でもたとえば、それまで短歌に触れてこなかつた人がはじめて手にとつて開いた歌集のその巻頭にこの一首があつたら、その人の胸中にはぶわっと風を吹かせて、感動させてしまいます。どうして場のグルーヴがコップの水がぎりぎりまで漲るよう最高潮に達したころに、誰もが予想できなかつた、かつその上で、一瞬で腑に落ちる回答が出され、会場は爆発します。

僕がもつとも印象に残っている回答は、人々がピクニックしているイラスト（下図みたいなもの）に、何か一言を添えてください、という題に対しての「パラシュートが開かない」です。現場でこの瞬間を楽しむしかないです。現場での回答を聞いた時には衝撃でしたし、会場の沸き方もそれは激しかつたのです。しかし、いまこの文章を読み直しても、あまりピンとこないはずです。文字上では面白さの熱が伝わらない、というのはもちろん大きな要因ですが、それに加えて、その解答に至るまでの流れの欠落も大きいはずです。現場での第一答えが、上記の答えだつたらどうだつたと考えられるでしょうか。少なくとももつと戸惑いの色が増えるのではないかと思われます。



「パラシュートが開かないで、もうこの瞬間を楽しむしかない」

誰かが髪を切つていつか別れを知つて 太陽の光は降りそぞ
ありとあらゆる種類の言葉を知つて 何も言えなくなるなんてそんなバカなあやまちはしないのさ！

（小沢健二／「ローラースケート・パーク」）

七望遠鏡

1



イメージする野原に、ハルジオンがせめて咲い　てみてください。
ていてほしい、という。

この一月の終わりに仲間を誘つてZoomを用いて歌会をして、その時の羽島かよ子さんが提出した短歌でした。集まつたメンバーは九名で、提出は自由詠を一首。選はそれぞれ二首選で行い、そしてこの短歌は〇点でした。このことを

短歌にまつわるあれこれについて
自由さままに書くページ
今号のテーマと書き手さんは…



牛 隆 佑

書き手

電話越しに野原の野ですと告げるときその野に咲かせてほしいハルジオン（羽島かよ子）

いい歌です。状況としては、たとえば職場で隣の席の同僚の野本さんが電話をしているので、どうか。自分の名前の漢字を相手方に正しく伝えるために『野本』の『野』は『野原』の『野』です」と伝えたのでしよう。それは仕事上の事務的な動作なのだけれど、その時の野原にせめてハルジオンが咲いていればいい、というのが基本的な読みでしようか。あるいは告げるの主語が自分でもいいですね。電話越しの相手が私の『野』の言葉を受け取ったときに、その人が

歌会ではもちろん評価の声もありましたが、批判的な意見は要するに「新奇性がない」「類型的である」というものでした。妥当な批評です。「野原」「ハルジオン」などのキーになる個々の名詞もそうなのですが、短歌としての展開も構文的とも捉えられるくらいには型通りなのです。そして構文的であるということは、「野原」「ハルジオン」の語を入れ替えて、歌人によるポエジーを競つた大喜利ができます。マナー違反ですが、やってみます。みなさんもちょっとと考え

僕が挙げた例が面白いかどうかは別としても、もし「野」の字に拘らなければ、バリエーションはさらに無限に展開できます。このような視点で見てみると、つまり該当歌の「野原」と「ハルジオン」は必然性と共感性の高さはあるものの、いかに模範解答的で「普通」であるかが判ります。

ところで、大喜利と言えば、歌会仲間に木曜何某という大喜利のプレーヤーがいる関係で、数年前はよく大喜利を観にいっていました。二回ですが実際に参加したこともあります。一度、大喜利を観戦してみるとよく分かりますが、大喜利は知性と感性をフル活用した個人戦のゲームであると同時に、司会や回答者、オー

テーマ　この前の歌会でちよつと思つたことがあつたんですよ

見過ごせる違和感

麻数

かうあげ棒のひとつを食べる

あばがど

鏡にも意地張りたくてへこませた腹に自分を騙し朝風呂
黒電話使う子供のポスターの横でツイートしているおじさん
水に溶く味付きタンパク質それとキャベツで過ごす健康な日々
「生きてれば色々あるよ」の「色々」に昨日の義母の紅が艶めく
里帰りする度替わる玄関の置物僕への視線は同じ
仮釈放の時も再逮捕の時も平気で虹はかかつたりする
見過ぎせる違和感だけどカラフルなタピオカ吸い込む彼等も人々
不自然な場所で流れるJAZZを聴き不自然な場所で落ち着いている

手のひらに落つ雨粒はいつだって柔くてきれいですこし優い
不規則なメトロノームとして雨は時に僕らを音楽にする
(雨粒を弾くワイパーみたいだね)じゃあねつて笑むきみが手を振る
いま最上川はどうしてるんだろう雨に打たれて歩く夕暮れ
煌々とかがやくオアシス真夜中のセブンの店員はまだ人間
星の見えない街のなか一等星代わりの赤信号がちかチカ
雨風をしのげる屋根の下にいてからあげ棒のひとつを食べる
午前四時 濡れた道路を照らしては月曜を待つさみしい街灯

Diurnal motion

阿曾辺かぎろい

あんがいじんがい

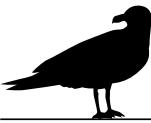
尼崎 武

木星を星の兄だと思う時事故死せる友シユーメイカー・レビイ・9
東京湾を廻遊し廻遊し柄シャツに描かれた魚は南へ還る
毎日は来る死のためのエスキース砂塵を描くのは誰のゆびさき
单调なカット割られた日常に記名すアラン・スミシーなる人
東京の閉ざされし庭園地とふ迷宮なればミノス牛あるか
洛中岡何處に描くのかグルマン市亀戸を過ぐ金彩きんさいの月
青年神オリオン春に陰りゆき死体より出ず馬頭星雲
踊りたいマスクを獸の面コとし行き交う街に死者を迎えて

肩甲骨よ翼になれと念じたが生えてきたのは腕だ　しつぱい
うつ病に良いらしく朝日を浴びる　ドラキュラであることを忘れて
だとしてもきみはおびえて泣くでしょう　ぼくは怪物　会いに行けない
猫系に分類された飲み会で虎のわたしはガオーとうなる
だつてきみに笑いかけたりできるでしよう透明人間にぼくは、なりたい
ホツとしてますけど人は首の皮一枚だけつながつても死ぬ
心に生えたマンドラゴラを抜いたとき心は叫び声をあげて死に、体はそれを聞いて死ぬ
幽霊になつても僕を抱きしめて　多分ぬくもりくらいはわかる

電話越しに焼け野が原の野ですと告げるときその野に植えてほしい撫の木
電話越しに野球の野ですと告げるときその野を駆ける周東右京

電話越しに野武士の野ですと告げるときその野に長巻構えておりぬ



限定の雪見だいふく買うまでにいくつも君のため息を聞く

キツチンに雜音はなく午後という光の中で煮詰めるりんご

待つことになるかもしけない図書館でゆつくりめくる恐竜図鑑

お互いに「だなもー」「だなもー」言い合ってなにもなく世界は優しい

ときどきは窓辺に猫がいる家を左に曲がつて行くスギ薬局

アレクサが面白いこと言うときに一瞬はいる間合いの静けさ

ブランコのない公園へ一斉に集まつていく春の風たち

志摩リンに燃やされていくマツカサの声で痛みを分かち合つてる

トヨナカガール

雨虎俊寛

おわりとはじまり

あるこじ

飛行機が大きな街の駅前で大きな傘をさすきみがいた

傘預けお天気雨に飛びだし泳ぎきれずに濡れるブラウス

差し伸べた傘をかわして先歩きまぶしいふりで空見上げてる

花束は持ち合わせないそれだけじゃ振りはらえない傘の雨粒

雨は過ぎ見えないだけで晴れ空にいくつもいくつも星を見送る

歩道橋でしゃがんでしまうジェット機のエンジン音が遠のいてゆく

一日に4回虹を見れたねと零のようにピアス揺れてる

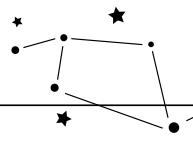
しあわせのネジを卷いたらスター・ターピストルが鳴りわたる街角

いつだって終わりにできるいつだって始めるときはそう考える
原色で終止符を打つどの恋もパステルカラーで始まっている
はじまりの町でいきなり最強の剣を売つてた店が潰れた
たつたいま予告が終わり本編が始まる前に起きるざざなみ
多分この女優はラストで死ぬだろう今の台詞を伏線にして
すみやかに所定の位置につきなさいそして予想を裏切りなさい
完璧な逆算が今できたから割り勘にしてもらうと決める
新居では生まれ変わろう人間は蛇ほど上手く脱皮できない

夕映えにちいさな影を立たしめて少し離れて眺めておりぬ
消えてゆく夕空が好き 吸ひこまれ生まれる前の光の中へ
月に手は届かぬけれど空になら 境界線のなき空ならば
「ドラえもんブルー」と名付けられた色それはまつさらに晴れた空色
大空のふかみへと飛ぶ鳥がわがこころの端を咥えていきぬ
空に触れるように背伸びをしてきみの心に少し近づいていく
どちらかの願いは叶う快音とともに見上げる春の蒼穹
空を舞うポリ袋さえ自由で僕ら中央線に囚われし天使
二十歳過ぎ絵の具まみれの中學のジャージは今日も凧ぐ空の下
やわらかな光に君は駆け出して空に向かつて両手広げる
閉ざされたワタシの空は真っ暗で月を探してまた泣いている
そういう雲が午後にはあつてねむいときねむいと呴けるアカウント
摩天楼が地空に線を引いてゆく淀川から見る赤い明滅
がうがうとこゑあげながらあをぞらをふたつにわかちゆく戦闘機
今ぼくが笑みをこぼした変な雲つかれたきみの空まで届け
怪獣とクリームソーダあの頃は空が飛べなくたつてよかつた
君を呼ぶ声はお空がのみほした夜をうつした酒をひとなめ

◆ 六厩めれう
◆ 村田一広
◆ 八重森さくう。
◆ 山上秋恵
◆ 山川仁帆
◆ 結川澄衣
◆ 遊糸
◆ ゆりこ
◆ 横雲
◆ 遊星
◆ 夜花
◆ 夜夜中さりとて
◆ うま
◆ 龍翔
◆ ルオ
◆ 若枝あうう
◆ 渡邊知博

「空」



テーマ詠

空駆ける羽 胸に抱き 恋の歌学びの歌を 三十一文字に

乾ききつた冬空白一筋残す機体 独り見上げてなぞる

そらいろのクレヨンあおいクレヨンは夏のあいだに短くなるね

くれるならきみがちぎつた一片のなんでもない日の空をください

空を見て最初に思い出していたあなたに僕を許してほしい

願うこと全部が星にならないよ だけど、そうだね 流星群だ

アバターで星空見せてくれたよね流れ星も良くできるねつて

テーマ詠「空」と言われて見上げれば空、どこまでも空、どこまでも

降りそうで降らない空にたいくつな傘がコツコツ地面を歩く

後悔の YESTERDAY を塗りつぶす海辺の空には YES しかない

風船が空に溶けてくお砂糖における紅茶と同じ原理で

飛行機の飛び立つ先に僕はいない空を見上げて妄想の旅

空になる梅にメジロが飛んできて新幹線の通った日から

懸命にふらここを漕ぐ青空につま先少し染まるくらいに

無明より帰る探査機我にまだ人の世留まれと諭し居り

朝焼けの雲は紫 この空に逝ければきっと幸せだろう

ほとんどの空港駅は終点で世に目的のあるひとばかり

◆ 細川エリカ

◆ 歩歩

◆ まきぞの

◆ 真島朱火

◆ 松本ユミ

◆ 真野ありか

◆ 御糸さち

◆ 三浦なつ

◆ 深影コトハ

◆ みづき

◆ みそのみそ

◆ みつてる

◆ 衣未

◆ 宮木水葉

◆ 宮嶋いつく

◆ 虫武一俊

明星

飯野太陽

日々の感慨

石川順一

泣いている猫と小鳥と沈丁花 僕が舐めたらみんな死ぬかな
暮れてゆく微かな夏と僕の愛 独り善がりなものは滅ぶね

これまでの記憶を全部消去して自惚れだけが底に残つた
「これからはもつとマトモにならうかな」なんて宣う君の瞳の黒

排水口みたいに無力に正しくて 責任だけは取らないでいる
神様を信じてみようと思うたび北で鋭く瞬いた星

溺死した前担任の死に顔を毎夜夢見て深く眠つた

明星の哀しさ思い鳴く鳥を今日の添い寝の友に選んだ

冬と風と王と

五十子尚夏

ライムライト

泉 葉子

如月の植物園に見しもののすべてに「復讐」の花言葉付す

Still life は静物画へと訳されてその水際に失うひかり
(眼を閉じてみれば) 冬野に絶え間なく風の necessarily という音

冬されの喫茶に聞くマクベスに魔女現れて我に語りき
盗人は奪いてゆきぬわたくしの最も嫌いな人の名前を

人ひとり裏切りてこの夕闇は渡りに舟というときの舟
王として逝きたる人の美しき名を永遠に冠する橋を渡りき

如月の合わせ鏡を抜けてゆく風 (うつくしく鎖されている)

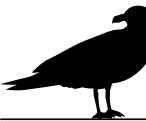
真っ暗な町に降ろされ迷い猫ライムライトをたどって歩く

同情はぜんぶもらうよこの灰も大きな鎌も小道具じゃない

少しずつ額近づけこのままいい?どこで生きるか決めてほしいの
あの世へは連れていかない思い出と全財産を奥歯に詰めて

傷んでる身体奪つてあたらしい夢を与えてあたしのタナトス
好きなだけ無理してもいいニセモノの夕陽おかえり水槽の家
オリオン座以外わからん恋人の普通っぽさがとてもよかつた

今夜から冥王星へ里帰りおとぎ話が降る空抜けて



君がため爪先染めしわが恋も この手のひらからつよいぼれおち
君がため春の野に出で花摘しこの指先も空をさまよふ
愛してゐる伝える指がかたっぽの貴方とわたしレベルが違う
覗き見た予測変換みずがめ座だから皆に嫌われる

「バカだから」線を引かれたもしかして僕は君の敵だった?
ありがとう真心こめて言うけれど君らはいつも「どうしたの?」
黄昏れの苦界に日繼ぐあづま宮虫を追うては笑み浮かべ
鳥告げる妬み嫉みの暗喩たちいつしかそれが笑い種

ソフトボール部の墓 伊藤すみこ

イ・スンヨプに似ているねと言った春 少しでも縮めたかった距離
真夏日に耳元でだみ声がする わざと三振したればええよ
青黒く腫れた小指に湧く怒り 早退します、家の用事で
背が高いだけで選んだファーストがショーバンなんて捕れるわけない
退部する? してもええけど春休み、練習来いよ 行くか馬鹿なれ
やわらかくぬくまつている空間を本能として知つてゐるはず
美術部で生徒会だからピアスを開けたお前は天才なのか
自画像がやけに上手な自分との向き合方に悩む青春

田にしみる 碓水藍生

ゆっくりと心中することにして先生のタバコの煙を許す
白い吐息傘を忘れて恋の歌わたしはわたしのことを知らない
T Vの好きな面だけ見ていたよきみは人形みたく綺麗だ
きみの目に溢れる青が痛かつたまつげも青く染まつていつた
カーテンが半分開いていて朝に私が存在してた証
そりや怒つていいんだよつて言われててそつか怒つていいものなのかな
駅弁のお米硬くて硬さすら愛してしまふみたいな夏だ
放課後にやるトランプの面白さほとのことはもうなくなつた

ヘリコプター空をかくはんして去つてもう街じゅうが空です 翔べる ◆ ネコノカナ工
憧れの比喩たる「雲の上」を超えて踏み台にして ゆけよロケット ◆ 根谷はやね
訳を訊く人の多くてもう空を好きと言わずに無難に生きる ◆ 野添まゆ子
スマホから撮ろうとしてた夕焼けが映りを意識していくやめた ◆ 薄暑なつ
この空は悲しい嘘と飴色のプラスチックでできております ◆ 薄荷。
「成人」に溺れかけてて息継ぎのように必死で空を見上げる ◆ はばとび
銭湯と神社の裏の路地らしい路地から順に夕暮れが来る ◆ 春陽
寝ぐずりの幼子と空見上げれば飛行機雲が明日へむかう ◆ ひーろ
ゆうやけの仕組みを知らぬから西の空に火をともすひとを想う ◆ 春ひより
青空にこだまする言葉 ラテン語で夜中はメディア 嫌いはオデイム ◆ 人々ひとり
小一時間 留守にしてると分かるよう空から雲をぜんぶ消しとく ◆ 雛河 麦
あの人と花火に行くつて聞いたからぐずつた雲を引き止めてます ◆ piyomaru36
この空が青なのか私の青がこの色なのかどちらでも、青 ◆ 平井まどか
別れの日空の青さの不可視にも空氣の底に背中を丸め ◆ 笛地 静恵
どの空を見上げていたか教えてよ古い本棚探す面影 ◆ 福山桃歌
階段を駆け上がつたら雨空で傘開くとき「ばきゅん」と小声で ◆ 古井久茂
絨毯も二段ベッドも地球儀も電子ピアノもない南部屋

◆ 古井久茂

「空」

テーマ詠



アクリルの板に囲まれほつとする僕らは空の水槽の魚

片脚が折れてしまつた虹もある空の青さについてゆけずに
レグホンの無数の靈がひしめいて曇つた空を温めている

◆ chari
◆ 月丘ナイル
◆ 梅雨崎ナノ力
◆ 月硝子
◆ 遠山文
◆ 堂那灼風
◆ 天国ななお
◆ 内藤絡
◆ 中村成志
◆ 夏本橙
◆ ともえ夕夏
◆ 波よこに
◆ なるなる
◆ 新妻ネトラ
◆ 西淳子
◆ 西村曜

きみのひざまくらで空を見上げてるぼくにかさなり影がちかづく
チャート式 埋められなかつた空欄に大きなマルが遺されて、春

夜という透明な盾 ふりそそぐ宇宙すべてを受け止めている
忘れっぽい伽藍堂に見せている「きみは空です。それは満月」

空色のシャツを着るには嘘つきなあなたが食べるミルクレープ
さつきまでシロクマだつた雲がもう形を変えた あれは群馬だ
水面に映る空には映らない川 君の目の先にはあの子

「あつぱれ」は末広がりに散る声のアッパレ天晴れ野に陽射しのみ
とりどりのふうせん空へ解きはなちピエロが春を祝福して
天空へ痛みを飛ばす 見上げれば夜でも雲が白いと気付く
はじめましてお世話になりますとびきりの笑顔で空と海へ挨拶
星空に祈る言葉もないけれど流れ星ただ見つける遊び
空色の色鉛筆は持つてゐるその他の色は全部なくした
神さまにたとえばここにいてほしい飛行機雲が空ぶつ刺して

屋上摸部

宇祖田都子

どこまでも行けそうな青空

江口美由紀

合鍵を渡されてより先輩を部長と呼べば摸部員なり
踊り場に白扉のいる階段を上りつめれば部室の扉
合鍵のざらつき方が昨晩の夢の黄砂に似てる屋上
でこぼこの伝言板に『ビー玉が砂にまみれてます』の消し跡
一昼夜部室に放置した壇に金魚一匹泳いでる朝
屋上で芋を焼いたりする部長マスターキーをもてあそびつつ
部長からマスターキーを託されて合鍵を元部長に渡す
白扉の眠りを妨げぬために継承される屋上摸部

一日について

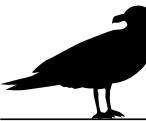
泳二

ラストが違う

榎本ユミ

君が乗る電車はきっと真直ぐに走つて来てはくれないだろう
君からの言葉はとても素つ氣無く五月はすぐに終わってしまう
君を待つ時間を少しかつこよく待つていてなくてグランデにする
君はすぐやめようかなんて言うから嘘をたくさん吐いて歩こう
君と会うのは雨の日が多いので小さなこともやたら眩しい
君だけの価値観のためあの店のあの酎ハイで乾杯しよう
君もあるニュースを見てた僕たちのことじやないけど少し似ていた
君に今日撮られた写真透明な君を見ている僕だけがいる

水際に足首くらい遊ばせて引き返すはずだつたのに ねえ
ハイボール落ちゆく喉を見せて 我の理性がかしげる夜に
我慢した傷がそのうち痒くなりまた傷になるような会いたさ
抱きしめていいのだろうか上頸のやけどを見せにきたりするから
きみじやない人と前にも来たかもと気づきぬ 高い声ではしゃいで
ふたりでも孤独は孤独 銀杏が踏まれつづけて街匂いたつ
うなづいてのみの電話にぐるぐると黒い羊が生まれゆくメモ



ひさかたの光のどけき春の日に背伸びをすればつま先も浮く
上ばきなんてもう一生履かなくてきみもあなたを忘れるだろう
口パクでうたつてごめん学び舎よバクハツしろとか願つてごめん
わらうから楽しいわらつていた日々を日々と呼んだら過去形になる
しりとりの速度で声をつないでは西へ過ぎゆく風にさらわれ
こんなにもかばんは軽く三月のブールは空を映しもしない
吹きだまるように門出をためらつて肩にさくらを積もらせている
さよならの代わりにはなびら、と云つた 手をふる代わりに枝をゆらした

白昼のコインショップで安売りの満州国のお金を買った
いま胸を過つた夏は過ぎた日の熱か半年さきの光か
臍帯をながれる河の血の色の俺色青い母色に似て

冷たい生き物

おうい

満月の光届かぬ海底でシーラカンスが見る花の夢
眠そうな嘘の目二つデメニギス光纏つて深海を行く
真夜中のシンクで蜃氣楼を吐くボールの海に蛤五つ
アロアナが飼えるくらいの水槽に植物だけが寂しく揺れて
毒を持つカエルみたいに美しい色を抱いて毒を持ちたい
見つかればロマンは消えてしまうからくしゃみこらえる遠野のカッパ
舌打ちを我慢しているイグアナも声が出せれば月に吠えたい
翼竜が西の空へと飛び去つて今日を明日へと繋げてくれる

繋ぐ手遠かりて

大坪命樹

傷付くるを傷付けらるれば涙目にて送るは桜が写真メール
ホームにて軋む鳴き声いつよりかサンダーバードの渡鳥なりにし
老体を嘆けばきみの笑み寂しげ サラに一度零すまじとぞ
別れ際フランペチーノのお裾分け 次飲まるまできみよ儘たれ
煤落としきみ帰らむ日に備へれり 夕の蝉声涼やかなる風
炊事中きみ口づさむメロディの世に古れぬるも鮮やかなるかな
疲れ伏するきみの傍にて無力なり 露けき道に車通る音
紅の差す白峰険しき暮れ空のきみとの散歩の帰り道かな

水たまり 潁る空でも虹は虹 踏まずに帰る大人になつた
義父の描く大人の塗り絵の空の色青い色あり赤い色あり
赦されし瞳のごとく星みえぬ空の深処に満月は出づ
青空にポップコーンを投げているきみが今年の春の光源
この耳であなたと空もとべるはず象が見ていたなないろの夢
縦笛で「故郷の空」を吹いた日のあの場所の空が私のふるさと
革靴をいくつも潰したけれどまだ探してしまう空の飛びかた
締めきりの窓から空を見ただけでなぜだか風があると思つた
見上げれば空には空の笑い方楽しいことが僕を選ぶよ
夏空を軽飛行機が飛んでゆくような音してスケボーの人
花の絵をかざる手つきでアリエールかおる洗濯物を空へと
もともとは星座を結ぶ線だった糸を使って話す雲たち
ふうわりと空からやつてくる風をつかまえてみる春のはじまり
入道雲の先の世界を見るために冒險に行くからす鳴くまで
プラタナス空をかくして生い茂り春はいつでも唐突に笑む
前向きな言葉ばかりが降りそぞぐ求人サイトの晴れわたる空
カボシヨンでつくる星空 眠れないわたしを空っぽにしてほしい

◆ 千原こはぎ
◆ 茅野
◆ 千束
◆ 田斗かき
◆ 竹林ミ來
◆ 田中翠香
◆ 武田ひか
◆ 瀧口美和
◆ 竹内亮
◆ 多香子
◆ 高木一由
◆ 蒼月まりか
◆ 草流
◆ 蒼音

「空」

テーマ詠

願わくば目を閉じ浮かぶ大月のありかは砂漠アラジンの壺
奏で合う弦の如きやひこうき雲きみがそらにも響きゆくかも
ゆりのきの黄葉はいつ公園をゆけば降り来る詩情ひとひら
始まりと終わりがなくていつだつて半端な僕と溶け合える空
神様が空の上から見て います多神教なら幾千の目が

たまさかに空の凝りしよにあればわれと思ふも波ひとつき
水溜まりが空を映して揺れている雨よ明日もあたたかく降れ
空は澄み風は聖らか鳥籠のふくろうだけが「はい」と言う夜
ああ空よこらえきれなくなつて雨 一滴二滴そしてどしゃぶり
老犬のあくびを見やるまなざしで父は二月の陽射しを仰ぐ
不安げにブランコを漕ぐ少年は悩みの分だけ空に近づく
でも僕ら、10kmぽつちのはざまから空つて呼んで空回りする
街にあるペンキ屋ぜんぶ電話して「空を染めて」と依頼してみる
決断は大胆そして纖細に銃タネそしてごはんで決まる
持つても傘はささない天氣雨 空とわたしが繋がる時間
引つ越して見上げてみても山はない空が広がるすぐに慣れるさ
晴天に雷鳴が散る ついさつき嫌いと言つておいてよかつた

◆ 沙羅粗伊
◆ 汝射ハルカ
◆ 紫苑
◆ 詩季

◆ 鹿ヶ谷街庵
◆ 西鎮
◆ シダタクマ
◆ 城山桜
◆ 章生
◆ 雀來豆

◆ 鈴木 精良
◆ 鈴原ゆり
◆ 水面狼
◆ 諏訪灯
◆ セサミスペースM
◆ 千仗千絵

はるのうた

大橋春人

四則計算

岡野伸吾

三月の夕の長さよ引っ越しをせずに迎える八度目の春
夕暮れのカラスの嘴はうつろ人間だけがマスクをつける
流星は宇宙ごみだという人と冬の終わりの空を見ていた
ゴミ箱にマスク溢れて春ならぬ春を今年も迎えるだろう
間違えたことだけ思い出している後悔の季節としての春だ
韻律が不自由になる樹の下に見捨てた人の顔がこぼれて
人類の原罪としての花粉症われも人間ゆえにくしやみす
夢もなく魔法もないが三月の雨は静かに暖かく降る

まっすぐに見つめましょうよもしかして二人の愛が廃棄物でも
「赤い糸」検索履歴を見てしまった右手にだつて自由はあるの
引越しの空白に置く石像はあなたの息を集めて作る
触れないで他の人にも触れた手で私の鎖骨だけを愛して
浴槽に私の死体浮いているもう何度目の情景かしら
たまゆらにどうせいつかは死ぬ命あなたの骨をしゃぶつていいたい
私だけのものではないとわかつて金魚は宇宙へ飛んで行つた
恋愛は四則計算ではないと教えてくれたあなたがいない

雪八景

岡田奈紀佐

革命

岡本雄矢

NHK天気予報の雪だるまマークに会える季節はいいね
東北の義母から届く雪景色 ここは遠いね、乾いた地面

鍋の底に沈んだ鮒に知らせたい明日の天気は雪になりそう
国境を見たことがなく国境を越えゆく雪も見たことがない
たまに降る雪を愛しているだけでバニラアイスを選んでしまう
煩惱の数より多く降る雪のまづげの先に積もりゆく白

あたたかな部屋のガラスは結露して音もなく降る音だけを聞く
一面の雪原もしくは永遠を見たいおそらく似ているだろう

水色の革命起こせ正装は青Tシャツと白コンバース
マイナスとマイナスをかけてプラスという意味がいまだによくわからない

国境を飛び越える時ジエット機はベリーロールになつてゐるんだぜ
1万円貸してください友人の答えを待つてキスアンドクライ
無駄のない完璧なフォームで歩いてる帰宅部エースの小野寺亮君
信号を渡つたとこのコンビニは帰りは渡る前のコンビニ
自転車で豪快にコケてやつぱりかこの夏最初の半ズボンの日
革命は誰かが起こすと皆思いなんにも起きない2年3組



容易さにまもられている手のひらを炎にかざせばほのおに染まる
青空は実際それほどあおくない 良くないくせに「いい」と答えて

汗と汗、それからなんかの分泌液 わたしときどき、死をかんがえる
「たいくつ」と裸の背中に書きながら爪が伸びすぎていてかなしい

思つてることはひとつも話せない 花瓶の中の枯れそうな花

かるい骨をもつて飛ぶのが鳥ならどこまで地面を足ですすめば
まよいこむように愛していい人がいたんだ微熱に身体ふるわせ
きつと嘘なんかじやなかつたこんなにも川面のひかりのように走つて

まよいこむように愛していい人がいたんだ微熱に身体ふるわせ
きつと嘘なんかじやなかつたこんなにも川面のひかりのように走つて

待ち合い室にて

尾崎 ゆうこ

はだ寒い病院の待合室に生き生きし過ぎるフェイクグリーン
おしゃべり好きの伯母から電話あり三夜続いてふつと途絶えた
荷ほどきをしてない箱が3つあり 段り書かれている承・転・結
ゴムの木が見下ろす近所の図書館のランナップに偏りがある
正月は帰れないね、とラインした手に持たすように買ったアネモネ
泣かなかつた。玄関で閉じた傘の端に花びらひとつ連れ帰るまでは
ゆっくりと酸化していくスプーンで昨夜残したケーキをつつく
ベランダで拭くガラス越しに映るのは私がいないだけの日常

勇者 E

音無 早矢

うれしくもないのに夢をみてしまう もう泣かないという主人公
ゆうべから何にも食べていなければ満足そうにしているモブB
草笛の音がBGMになることはどうやら新しい街
この屋根はあたり判定がないです 勇者のあなたにだけ教えます
日が差せば だんだん弱くdim.になつてゆく勇者はちょっと頼りないです
「求人に時給1200円だとあつたから来た」——勇者の仲間F
勇者には危険手当は付きますか？ あつ、別にないならいいですよ
勇者だって小さい頃の消しゴムにちゃんと名前を書いていたんだ

この空にガソリン撒いた神様は西にマッチを落としただろう
空見上げイエスさまつてつぶやいた至らぬボクとひつじぐもたち
太陽は西に沈んだ まだ空に残る黄色い部分見つめる
昇るやろほんなら空の真ん中で次にするんは手え振ることや
潔さ耐え忍ぶこと清らかさ空はいつでも教えてくれる
曇天とビルのグレーが同化する東京の空に広がるコロナ
ぼくの歌う聖歌に合わせて続くのだ白い軍服の兵士の行進
満月より半月が良い 早春の 空は蒼くて 心安らぐ
空ひとつ小さな窓の中にあり消息のない人にも春を
ひさかたの空にぱかぱかペガサスが陽気を連れて駆けるぱかぱか
わたしたち空に転職できなくて不思議だねつて花びらに言う
滑空をしたがるやうに広々とベッドいっぱいあなたの寝相
空色のインナーカラーを靡かせて正直者のやうだあなたは
夜の帳が下りる頃わたくしは月を探して眠りを待つてる

自転車で坂道登るこんなにも空は広くて吾は不自由で
集いあい遺稿歌集を読みあえばまず星空に春は訪う
繰り返すシンコペーション分かたれた僕らの空を雲がつなぐよ

うれしくもないのに夢をみてしまう もう泣かないという主人公
ゆうべから何にも食べていなければ満足そうにしているモブB
草笛の音がBGMになることはどうやら新しい街
この屋根はあたり判定がないです 勇者のあなたにだけ教えます
日が差せば だんだん弱くdim.になつてゆく勇者はちょっと頼りないです
「求人に時給1200円だとあつたから来た」——勇者の仲間F
勇者には危険手当は付きますか？ あつ、別にないならいいですよ
勇者だって小さい頃の消しゴムにちゃんと名前を書いていたんだ

十一月 君の異動の張り紙に動搖してゐる私がいたり
目に見えぬ場所へ行くならともかくも隣の部署に異動するとは

好きですと伝えるでもなく伝わつて距離を置かれてしまつたようで
何回も話しかけてもすげなくもうダメなんだと諦めたくて

諦めることができれば楽なのに諦めきれない諦めきれない

そんな時君から言葉をかけられた「いつも編み物やつていたよね」

大丈夫もう大丈夫少しでも私のことをみていてくれた

君のこと忘れるることはできずともきっといつかは諦められる



「空」 テーマ詠

流星が空に還つてゆくような遠い飛行機にも願いごと
どしや降りの空を見上げてみたくなるビニール傘を買ってよかつた

廃駅の名をうつすため青年はカメラを少し空へ向けたり

空色のクレヨンありき母の家暮れに餅持ち元旦御節

涙なら俺が大事にしまうからそらよ代わりに泣いてくれるな

ぼくがいま見ている空の水色はコンタクトレンズの色かもしれない

深呼吸していいやろか湖に乗る冬空に相談してて

空耳をついとつまんで囁けばほんのひととき戻る風向き

日が経てば経つほど消せなくなつていくカメラロールに匿つた空

空にしたテトラパックの牛乳を踏み潰すアドレナリンが出る

合成をしたような空見つめでは真実ばかり追いかける日々

住みやすい風なんだねと空みあげ だつてこんなに綿毛が飛んでる

澄みきつた空にふたりで手をつなぎ記念写真に影おくりかな

きみと似たぬくもりがあるハチミツの甘さを残す空のカップに

遠くないうちに滅びる人類が出した答えを知つてゐる青

ショッピングカートを押してどこまでもきみといきたい空の上まで

空っぽの箱に希望を詰め込んで新たな日々を歩み始めた

◆ 音平まど

◆ おもち

◆ 貝澤駿一

◆ @kaizen_nagoya

◆ がね

◆ カラスノ

◆ 涵れ井戸

◆ 川原まりも

◆ 神奈備夕凪

◆ 菊池洋勝

◆ 北の

◆ きさらぎ なる

◆ 橘高なつめ

◆ 北村美晴

◆ 木野葛紗

◆ 木村 権

◆ 京野パンダ

ぱかものよ

貝澤駿一

神に近い生き物

がね

うらなりの末弟の肩に降る花はひかりを巻きこみながら
ブレザーが見る空のゆめ海のゆめポケットのなかに日々があること
草原に風が吹いたら道ができるきみが駆けぬける速さでもいい
ばかものよ 守るべきものをきがしてはいけない守つてきたものを守れ
残るべきひとらアーチを組み上げるヴェールの向こうあたらしい風
いつかきみもスースが似合うようになるばかものだった日々も愛せよ
捨ててしまう地図をひろげて三月の空は無名のきみにかがやく
「じやあ」といえば「また」が続くと思うだろ 風にかき消されたそのあとも

まずひかり、ではなく音を創り給う子守歌から始まる神話
胸元に笑顔で眠る似姿にわたしも神であつた日がある
泣く前に吸い込む息は生きていくために吸い込むこの世の息だ
母乳へと姿を変えた血液を与えてあなたをこちらへと呼ぶ
洪水をかつて起こした泣き声のいまだ知らない24時間
わんわんもぶーぶーも世に創り出すあなたは神に近い生き物
ドア一枚隔てた先で子供らの声駆けていく午睡の隙間
神様は残酷なもの絶滅を忘れさせたる恐竜広場

佐伯裕子への返歌

@kaizen_nagoya

二万円

涵れ井戸

子供とか配偶者とか英語とか何度叩けど送信できず

素晴らしく楽しいというかたわらで雀も踊り私も踊る

鳥になりほおづき小川を行き来して日がな一日暮らして いたい

菜畑を絵に描き風をあつめてとあしたてんきになれと友いう

にしひがし武急横浜有楽町2019相鉄つなぐ

帽子なくドン・キホーテになれぬまま風を描こうよ空色のクレヨン

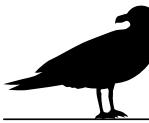
見つけだす夢の切れ端吹奏でクラリネットの響の反射

山折りに紙を合わせて冬の日の手紙は生者へうろうろいくか

推し漫画ひたすらに推す番組を録画して観る仕事帰りに
漫画好き外国人や芸人が好きな漫画をめちゃくちゃ語る
この冬は電気代月二万円テレビデオを買つたせいなのか
二十年以上やつてるバラエティ番組のキャストの知らぬ顔
新顔の芸人の落ち着きぶりでテレビ文化の変遷を知る

あつさりとメモリー埋まり連ドラに追いつぬまま年を越したな
雪掻きシャベルの切つ先が欠けたら些細な願い叶つてほしい

オンライン書店で買つた漫画本帯の破れが少し気になる



からっぽの心で空を見上げてる干した布団の上掛けの上
空に居る気分になれる帰り道車窓に揺れる 淡色の雲
ひと息でこの冬空を吸いこめば光るだろうか胸にオリオン
夕暮れをゆふぐれと詠むひとたちのうらやましくて大きゆうぐれ
残された羽で手紙をかいてやる空の匂いはどんなのですか
風船よ向かった空はいつも青いわけじゃないから覚えておいて
夢を見る私みたいね回送車空っぽなのに空っぽなのに
果てのないコロナの冬の雲くろくそれでも空へ投げ上げる旗
深き空に鱗の白く輝くは龍の巻きける稀なる秋かな
コンビニのビニール袋が舞い上がるいつまでそばにいられるだろう
時は溶けひきのばされる星雲の葉はゆれている森はざわめき
聰明な空の青さを知る人は群青のプレハブ小屋に吾と暮らしてた
空は飛びたいけれど変な虫とかは食べたくないでの鳥にはならない
空色のマフラーをして線路沿いをまっすぐにまっすぐにむかうよ
ほんやりときみの頬笑み消えゆきてなお目蓋にはうすいむらさき
傘ささず雪降る空を見上げれば全て許される気がする午前
「リズム感ないよね」つていつてくる君、おそらく空氣読めないでしょ?

降り立ったその瞬間から水彩でゆらゆら揺れる光の方へ
眼裏を誰かが過ぎる一瞬の長いため息失語症の鳥
追いかけてふと気がつけばひとりきりもう何度も目かの影踏みの後
色彩を重ねる度に浮き上がる輪郭の様わたしのすがた
街灯のともりはじめる鈴の音を順番に聴く夜はもうすぐ
光源をなぞつてつくる街路図のどこにもいないわたしの温度
鳥籠の隙間を縫つて駆けてゆく子らの背中が引き摺る羽音
渲んでは夜の向こうに延びてゆくバードノイズのアーケード街

春に置いていかれる

神奈備夕凪

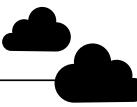
「お前ももう二十歳で大人なんだから」手近なものから色を失う
さまざまな祈りのかたちに立ち眩み私は春に置いていかれる
気休めに行使してみる言靈が恐ろしい人向けの黙秘權
宵の春さまよう私を他人事という距離のまま笑つてほしい
好きでした初期段階の正しさがやっぱり大人になりたくないな
足並みが乱れ始める卓上の暦は「二〇二〇年九月」
単純に生きていたいの明確な志望動機がたとえなくとも
寝る前に一回一錠現実を逃避してみる（目が冴えていく）

花の精霊

橋高なつめ

なまぐさい風吹きだまる春先に折り目のついた喪服をゆずる
水滴が流れる窓の冷たさとマスクのうちに籠もるつぶやき
桃色の綿菓子でしようあの雲は 口の寂しい子のひとりごと
心配をよそにおどけて水銀の体温計をかざした空に
ふしぶしは腫れてみにくい若き日の古いリングはもう嵌らない
うつむいて歩くわたしの影にふる赤いツバキの散らばりぐあい
ものすごいスピードで追いかけてくる夕日に噛みつかれた踵が
枯れてゆく花から逃げる精霊を呼び止めるしわがれた歌声

「空」



テーマ詠

ふたりして空の青さをたしかめず次の言葉を探す三月

晴れやかなシエルブルーのワンピース今きみこそが希望の象徴

てのひらを空にさらしてうつつとはみなしらほねになるまでの恋

馬鹿みたく今日は青空澄んでるので神様はいないと思う

星落ちて鼠の群れと人は失せ歌舞伎町未明の空と繋がっている

星ひとつ滅びし夜空に繰り上がる王位継承権というまぼろし

空中に行方不明の錦虫が空の青さに疑問を呈す

美しく見えるのは死期が近いから空は何度もうまれかわるの

フォルダの中の千切れた蒼、青、あお鮮やかなのは色彩ばかり

江北の空はくもれど雪とけの水に今年も翡翠の飛ぶ

母を待ちながらココアを飲む日暮れ 男の蟻が缶にむらがる

夕焼けよ彼の痛みは広角で直視できずに両目を覆う

ぶらんこはひかり団地の空に浮くアウフトクトをつかまえようど

手を伸ばすもつと伸ばして触れるもの 飛行機雲の終わりの部分

一面に青い絵の具をぶちまけたとか思つてる僕の泥酔

外は雨 畳の上で天井をこじ開け届く目に見えぬ青

青空を背景にして飛び立つたテントウムシが指の先から

◆ 雨虎俊寛

◆ 新棚のい

◆ 有村桔梗

◆ あるこじ

◆ 飯野太陽

◆ 五十子尚夏

◆ 石川順一

◆ 泉 葉子

◆ いづく

◆ 磯山武士

◆ 伊藤すみこ

◆ 魚住蓮奈

◆ 伊藤佃

◆ 碓氷藍生

◆ 梅鶲

◆ 游二

チャモチャモ島へ

きつね

PARCO に行った

去年

君はもうりんごやももじや喜ばずピンクのグランドライトを探す
400ベルにしかならないしうるさいし ついでに鈴木の悪口も言う
ジャステインのカウントダウンが始まつて花を散らした欲深い足
かと言つて売つても安い値段だし余つたレシピはチャモチャモ島へ
誰か死ぬことはないけど幽霊とはかいしはある入れたいやつも
偽物の方に惹かれる触つたらふかふか浮くし目も光つてる
フレンドの島でもらつた物だろうネコのトイレを設置するたま
雑草が増えるくらいで人ひとりいなくとも楽しげなこの島

ピリオドをあちこちつけたきみが来たドットワンピにくるむ春風
快速の方が早いと言いながら普通に乗つたスマホをなだめる
この人はジイさんなのかオジさんかわからないまま席を譲つた
20%OFFの計算するときに8をかけてるぼくを見ている
ミラノ風ドリアを頼むミラノでは半熟卵乗せないだろう
帰り道、言葉の泡が弾けない。言葉にできることが嬉しい
右脳から左脳へきみを移して手を振る時にそんな気がした
着るまでは新品だったこのニット古くなること受け入れていて

夏のおわりに

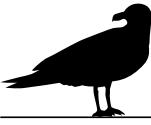
木村 槿

きよんひめ

オーマイ ジーザス

ふるさとは時間をかけて変わつてくコンビニまでは徒歩20分
があちゃんの生きがいとして生きている須田商店の古びたポスト
あのころは果てしなく遠い町だつたきみが越してつた隣の町は
裏庭のちいさな墓地にねむるのはビー玉、金魚、骨型のガム
ロッキングチェアは記憶どうたたねを行つたり来たりしての乗り物
玄関のピアノは歌わなくなつて大きくなつた家が鳴くだけ
テトリスのようにふるさとの銘菓を詰めこんでゆく夏のおわりに
駅前の文房具屋はもうなくてタイムスリップは二度とできない

伯爵に平和園来てと言うたけど実現せずにコロナの世界
伯爵のマスクした顔みたことないわたしの日常には存在しない
光冠茶会 カヒミ・カリイが母となり花を活けるはニキつて娘
新しくできた教会その悩み地域の民をぜんぜん呼べず
つまんないオンラインの礼拝はすでにラジオとなりつつもある
神さまが楽しいこととにんげんが楽しいことはきっとズレてる
キモノきてネット礼拝守るとき眠気ざましにキツイ着付けよ
「聴く聖書」愛のことはは容易いが君は同時に傷つけている



テーマ詠 「空」

卓球でちょっと遊んだこともある小野さんはもう遠い人妻
グラサンをかけた自撮りが待ち受けの高野が悩む ヒュツと励ます
走つてゐる人が急いでいる顔をしていてこれがよく合うんだよ
客のない洋服店の店員がなんだかんだをひろげてたたむ
雪合戦の音が聞こえる 悪を倒すために投げるという声もする
「やめなさい」ばかり言われるヨソの子の声もひつくるめて昼寝した
カードから金の抜かれる夢を見て六十分の眠りが重い
日の暮れた道を歩いて影だつたドブだつたもう会えない人よ

久保哲也 水属性の本
黒須紗里菜 空
相河東
アオ
青木夕海
秋山生糸
青時
青藤木葉
朝野陽々
麻倉ゆえ
阿曾辺かぎろう
アダムス理恵
阿南周平
あばがど
尼崎武
甘宮雨
天野うずめ

「オアシス」と名付けてあげた背の青いノルウェー産の鯖の切り身に
海を見たことがないならおじさんがちょっとしたものまねをしてやるう
「恋をして前の仕事は辞めた」とか言いだしそうなほど林檎飴
本当にごくありふれた枝でしたあなたがおみくじを結ぶまで
泣く前に妙に明るい人がいてゆつくりとした破裂と思う
オレンジはキウイに比べまごころに近くて坂を転がりやすい
駅にある「善意の傘」がたどり着くいちばん遠い場所を知りたい
そりやあまあ逃げちゃダメだと思うけどアフロにするのもどうかと思う

老猫はトイレの側で慎ましく粗相もせずに途絶えた潤声
死と別れおまえが初めて見送った2000gの家族は空へ
人だけの暮らしに慣れた筈なのに服に遺つた猫の毛連れて
変わりなくお元気ですか路地裏で時折会えた2丁目のボス
コンビニに張り出されたる迷い猫家族会議は全員一致
咳き込みぬ吾子の寝顔を見守りてゲージのなかで寄り添う仔猫
潤声でねだる仔猫は亡き猫のだましい宿りまた抱かれおり

衰えて日に日に瘦せる老猫と産まれたばかりの赤子を抱え
太陽の上に広がる雲はなく近く見えても遠い存在
カプチーノの泡になれない多摩川の泡はひたすら直線をゆく
太陽のまちがい探し朝焼けの高さをこえて飛行機は飛ぶ
象牙色にノートがかわる朝7時の実習室には無音の人々
7色にミンティア光る朝靄の中からのぞく白い太陽
太陽の光線のびて菊の花に朝日が見える広い青空
剣山にリングノートの影かわる右のページは花の名を書く
無機質な窓になりたい太陽の輝きにでも負けないように



電話越し深夜0時のカラオケを抜けたきみから届く月光
更けてゆく夜はちいさな永遠で薄い毛布の感触のまま
まだ冬の気温の春のさみしさを纏つた声で交わすおやすみ

静脈に水色の血が流れてるきみはどこまで幻なんだ
甘やかすように笑つてくれるからひよこの絵文字ばかり使つた
おすすめの本も映画も遠すぎるシャツのボタンもたいせつにする

完全な春を迎えて会える日の街灯ぼくがぜんぶ付けるよ
ここからは立ち入り禁止 真っ白なぼくの通路をきみが汚して

電話越し深夜0時のカラオケを抜けたきみから届く月光
更けてゆく夜はちいさな永遠で薄い毛布の感触のまま
まだ冬の気温の春のさみしさを纏つた声で交わすおやすみ

静脈に水色の血が流れてるきみはどこまで幻なんだ
甘やかすように笑つてくれるからひよこの絵文字ばかり使つた
おすすめの本も映画も遠すぎるシャツのボタンもたいせつにする

完全な春を迎えて会える日の街灯ぼくがぜんぶ付けるよ
ここからは立ち入り禁止 真っ白なぼくの通路をきみが汚して

馬鹿な人

若枝あうう

やわらかなごめんなさいの音程に潔さとは歌だと思う
楽しげに買い物カゴに足されゆく一晩分の未来の重さ
きみだつてつらいのでしよう LEXUS に背負われている初心者マーク
山芋がとろろに変わる瞬間のそんな傷つけ方を知りたい
ほぼ久保田利伸でしたしゃっくりを止めようとするきみの動きは
夜のことは分からぬのにカフェインが体に染みているのは分かる
あかねさすオン・ザ・眉毛に俺だって目を逸らさずにいればよかつた
満開の桜の下できみだけに馬鹿な人って呼ばれてみたい

救い

くうだたけし

短歌はじめました

小金森まさき

白すぎる光のしたの干からびたシンクを濡らしていく朝の水
すぐ古くなる新しいものを作る巡り続ける鳥たちに空
食前と食後の不毛な打ち合わせ試しに飲んだ胃薬が効く
絶妙に不快な音の警告に吐いてまた食うみたいに慣れる
そのうちに徵集されて旗を振るちゃんと望んでいなかつたから
もう進化できないのかな降りてきた天使がみんな武装している
音楽を止めてそろそろ沈黙を受け入れましようわたしのために
おそらくは二度と会わない人からの笑顔を持って余しつつ受け取る

ゆきどけ

香村かな

咲かせたままで

古閑弓子

いつになく早く目覚めたりビングでひらくメールに桜の絵文字
そういえばまだ言つてない約束の温度を指で確かめている
だからもうやめるつもりでいた春を駆けたい妄想サイクリングで
じやあまたね。余韻のせいでこの先もしあわせだからたぶん永遠
どの青をえらべば君に合うだろう春の日差しも少し加味して
もう終わる白い世界に佇んでいるあの鳥はきっと夢だね
春からはまた忙しくなる君と肌寒い日を共有したい
ほら四月。色づいていく者たちは深呼吸することも忘れて

「じゃ、ばいばい」笑顔を見せて手を振ったもうお前には見せない笑顔
白梅の風が流れて春が来る知らないまちにわたしが来たよ
壁ばかり白くまぶしい空っぽな部屋からわたしはじまつていく

にんげんの巣がたちならぶこのまちにすんでのわたしわたくしにんげん
生活を少し変えたい一輪の花が看られず静かに逝つた
息さえも五月蠅く思う朝だから水しかでないシャワーをあける
荷物だけ取り扱われた部屋に寝る今夜は一人背中が痛い

未来とか自分のことは見えなくて回送列車を見つめている
にんげんの巣がたちならぶこのまちにすんでのわたしわたくしにんげん
生活を少し変えたい一輪の花が看られず静かに逝つた
息さえも五月蠅く思う朝だから水しかでないシャワーをあける
荷物だけ取り扱われた部屋に寝る今夜は一人背中が痛い

さうさう流れ

和田晴美

カポタストとおでんを取りに来るという子のする事は全て愉しい
悲しくはないのに号泣した感じらしいね川はさらさら流れ
身体に不具合はなく眠いだけその理由は知らずに光る石
吐く息を結露させてはサージカルマスクの頸から零れる涙
かおかおと鳴啼き渡るこの朝も地表に寂しい生き物の群れ
水鳥が不意に潜つて戻るまで確かめ歩きだす 二月尽
咲き出した時が最も濃い色をしているのだねそれが花だね
しらしらと輝く月に照らされて影と私と自転車は行く

救い

くうだたけし

短歌はじめました

小金森まさき

ただひとり言葉の海に飛び込んで泳ぎ方など知らない今まで
料理中洗濯中に掃除中 頭の中に歌詠む小人
TLの二三行以内の文章がだいたい短歌に見える三日目
切り捨てか一字を足すかそのままかどつつかずの六字に悩む
選ばれた言葉の裏で捨てられた言葉を拾つて鞄に仕舞う
音楽を奏でるように指先を彈ませ歌う 静かに歌う
漫然と生きた日々にも我がいて心があつた、と思い出す日々
楽しくてただ楽しくて楽しくてずつと言葉をこねまわしてて
空想の街の名前を呼び合つてそのいくつもが雪解けのころ
胸を張る鳥のまなざし涼やかにわたしのいない遠くを見て
してもらつてばかりでごめん三月は花束みたいにいっぱい会おう
透明にいつもなにかが仕切られてそれでも届く春のひかりは
また涙もろくなつて 星光ることを臨界点として立つ
白い紙に無数の文字を書きつけて炎えてこのまま海になりたい
ねむるよう生きていたいよ 花瓶には水とひかりを咲かせたままで
両腕を広げてごらん今だけはすべての泉が涸れないように

湯豆腐を掬ふときあなたは雪を、わたしは砂を思ひつつする
広告を見た報酬としやつくりを百遍したらゆける天国

こんなにも大きな恋は今までになかつたですと睫毛を伏せて
幸福はしらないやうな顔をして路地の窓辺をとほつてゆくね
切り落としたて世間に疎いけどやさしい色の小指をどうぞ
むらさきはよくない縁起とほざかる一輪挿しに咲くあかねさす
生物の時間になにを学んだの狸ばかり侍らせてゐて
語られたとほりの暗いゆふぐれに境界なんてなかつたやうな

平成のエイリアン

御殿山みなみ

目薬のように睫毛が受ける雪　いや、みぞれ、いや、もっと雨寄りの
つけた瞬間紐ぶちきたマスク見てそのあとに見るセブンイレブン
あすの仕事はあす来るんだな行けばある原寸大のテーマパークよ
福笑いの片づけられたあの顔、だれにもないと思つていて
気づいたが指は分岐でそれを動かして掴んだプラモデル
死んでから輝くひとが　ぜつたいに花輪の茎に先端がある
暗闇にうごめく影があなたへとなるまでのあいだの物体
語つたら終わる話を持つてると思つてるなら池を覗いて

「うたそらによせて」

横雲

スタンダードナンバー

龍翔

梅の木に鶯つどいうつくしい歌の数々うたう春くる
棚霞たなびく峰に高行けば楽しい時をたかぶつて待つ
外遊びそぞろ歩きは其の日過ぎ素知らぬ顔で添星を指す
ラブラブの裸心晒した楽園にライトを浴びる爛漫の花
にら摘んで卵とじした春の味誘われている甘い香りに
寄り添つて深く息する胸の形決意告げると見えた曠夜
せをはやみわれても末と願いつ吉凶半ばに過ぎた七歳^{ななとせ}
てはじめに君への思い記しての出合いを祝う短歌に寄せて

陽気

横浜のみ

歌う小鳥へ

ルオ

前髪に埋もれた綿毛を逃してあなたの野原に訪れる春
穴の空いた靴下ばかり持つていて爪もそこだけよく伸びていた
氣まぐれな花は枯れても捨てれずに五月の雨に風邪ひかされる
うたうことやめたあのひと会社員ひつじつかいのように早起き
陽が当たる布団の中に隠れてるビーナスになるサナギのふりして
いつも必死なのであなたの穏やかで要領の良い八重歯が怖い
モネの池で浮かぶ枯れ葉　風が無いときの言葉をググつてしまふ
飛蚊症というらしいが私にはたましい見えたものだけ信じる

この部屋は黒が足りないさう言つたわたしがとても黒かつたのだ
おほかみをこころのうちに飼つてゐてそのそとがはに檻はありたり

「上がりなよ、何もないよ」と言はれて上がつてしまふわたしいうちがは
リビングに子供のおもちゃ　玩具とはこどもが遊ぶためのものかは
「だいぢやうぶ子供は親に預けてる」そんなことなど聞いてないけど
期待ならしても良いよこの部屋に上がつた時に諦めてゐる
器だと思つてゐたらヌーブラでヌーブラだけど器のやうだ
おほかみを無理やり起こすほんたうに大事なものはそのうちがはに

母は姓を捨て故郷も遠いこの土地でふたりの子と放たれた
若い頃あなたの帰りは真夜中で、私ひとりで月を見つめる
真夜中に彼の作ったラーメンを少し奪つて食べる末っ子
中学に上がる頃には長子が反抗期に入り、うまく笑えず
大人しく何を考えているのか分からぬ末っ子宇宙は広い
泣きながら一緒に死のうと包丁を娘に向ける分からぬから
唯一のふたりをつなぐ花束は、毎年忘れず3月にくる
好きなどきに起きて、ココアの一杯を。家事は嫌いだ、笑つて転がる

すべらせたタイムラインに浮上する貴女の歌に止まる指さき
できていく本と企画とつながりとその軸にある歌が好きです
まあ今は会えぬ距離だし多忙だし稀ないねで許されてたい
さもばつと出来た魔法のような歌その原料はたゆまぬ日々だ
れんかつて打てば恋歌になるのでしょ恋を尊ぶ指の意のまま
かみさまがいるならあげてほしいのはコップ一杯分の優しさ
つかれたときつとあなたは思わないだから労うより歌いたい
おもうのはいつも優雅であるひとで盛況なれと願う九時すぎ

マスクの中の息は誰にも触れなくて人類はもう滅びてしまう
冬の朝に窓から見える街路樹のひと葉ひと葉に名前をつける
手を洗うなんども洗えれば指先は切れて痛むがそれでも洗う
時短営業の店は閉まってしまうからあなたと過ごす夜のみじかさ
(なんのため) テイクアウトを選択し横に並んで咀嚼している
マスク越しに口づけをする陳腐さを許してあげる春がくるまで
口笛を鳴らすあなたの唇を最後に見たのは夏だったか
大安に宝くじを買うようなふたりになろうはるなつあきふゆ

黎明

結川澄衣

ファスナー

ゆりこ

人生は螺旋となつて巡りゆきやがて海へと届くのだろう
夜を越え幾度も電話をしたけれど壁紙の色さえも知らない
鋭くて甘い言葉が欲しいから金平糖を口にした夜
新しくピンクブラウン染めてみた一足先に春になるきみ
爪1つ1つを筆で丁寧に塗つて名前を付けていく朝
人生は搖蕩う船のようだけど、どこへ行くのかカモメが鳴いた
道端に転がる空き缶ゴミ箱へ夜の亡骸弔うように
夜になり家族がみんな目を閉じた私はメアリー花園探す

はるのはなうた

酒匂瑞貴

水中のプルミエラープソディ

佐藤水魚

声のない唄の聞こえし人混みにいて揺れもなく咲くハルジオン
傍にいるだけで良いつて思つてた頃に芽吹いた菜の花を摘む
白線を踏んで歩いた大人にはなれない我を見送る葦
蓮華草つんと摘みとる帰り道無口なままの恋でも綺麗
君の声こころ深くに閉じ込めて勿忘草は空を真似する
貴方まで届かぬ飛距離で散つていく桜の花弁は涙のかたち
フリージア玻璃の花瓶は冷たいかあの人のいた春へ帰るか
君がよく口づさんでたハナミズキ百年続く愛があること

明日は遠い未来だ

さとうはな

象一かたち

沙羅粗伊

大学の口ゴが掠れたシャカシヤカを相部屋に干す 勒いはローズ
飛べるかも知れないからと背に風を孕み歩いた図書館の傍
マイメロのベンケースへと詰め込んだ作り笑顔と寂しさの粒
フリースは静電気帯びETと君の指先友達のまま
ユニクロのパークーで行く紺色が3人かぶつて制服めいて
バイトへとピンクメイクで遅刻するあざとかわいいビッグスウェット
噛み合わぬファスナー無理に押し上げた止め金具飛び流星になる
人間の着ぐるみを着た火星人帰る手立ては見つからぬまま

地球上さいごの二人の顔をして海への坂を飛ばす自転車
見えぬものだけ永遠だ 砂浜に並ぶ鞄に小雨がかかる
「早春」と発声すれば海原にひらく帆船、風を光らせ
両の手はポケットのままあまりよく知らない歌の輪唱をした
今だけをきみと笑つていられればいい明日とか遠い未来だ
くだらないことを聞きたい 遮断機が上がれば街はしろく光つて
落書きにまみれたベンチでじやがりこを交差に食べた きっと大丈夫
木蓮はまだ蕾だというきみの声が汽笛と重なつて、春

柱時計のデジタル音は違和感 裡なる螺子の軋むまひる時
十連の綴らなる歌睡月記に籠の家温き炬燵上に
見上ぐれば凍夜に走る寒星の痛き裂傷鎌鼬
満月に跳ねる海豚や悲しかろ蒼のえのぐの透きとおる海
「夕飯は外でするから」：引っかけたシャツの破れに指通す
冬空に投げ上げた球放物線 Σに溜まる君の象
黙の朝卓山越えの雪ひとときに街塗る冬景白闊かなる
まだき春か細き瀬音雪下に春待つ森は猿の遠耳

星と雪のまち

汐射ハルカ

前世は双子

鹿ヶ谷街庵

朝焼けのビルの間隙点すのは明けの明星出掛けるぼくは
温かさ胃の中に滲む道すがら冷めゆく星と夜の風花

仄白い頬の乙女は内在す清き泉と熱い脈動

湧き出でるひそかな水に手を浸し漱ぐ舌先すぐ初冬在り
うら若きをとめは何ぞ覚ゆ哉闇夜の空に北斗七星

返答は醜聞を越え到達す届けココロよ氷点下なり

新月も満月もある中空におわりなどないはじめなどない

氷柱からこぼれる雲襟巻に染み込むまちは瑠璃色の空

湧き出でるひそかな水に手を浸し漱ぐ舌先すぐ初冬在り
うら若きをとめは何ぞ覚ゆ哉闇夜の空に北斗七星

返答は醜聞を越え到達す届けココロよ氷点下なり

新月も満月もある中空におわりなどないはじめなどない

氷柱からこぼれる雲襟巻に染み込むまちは瑠璃色の空

詩季

冷光

シダタクマ

ショートケーキ食べ終え揺れてすぐ避難人生の汚点無錢飲食
携帶の「だめだやられた」に問うているそれは何かと震える指で
津波とは黒壁の水かたち無きものが隠した色と質量
声のない慰めでしよう星たちは全てに降りる全てに等しく
新聞の残酷ずつと未来へと広がるはずの彼らの名前
爆撃の景色と匂いが広がつて誰もが見せる困惑の色
揺れただけならば許していただろうその日の大地ふるさとの海
電柱は斜めに生きる忘れるな備えよと立つ今日も明日も

枯野なるよをくらがりて迷ふ身はつきのあかきもほむらと覚ゆ
みのよどのよごとふゆらむはふれどもはふれどもこのはらの冷ゆれば
この身こそほりとぢめとむすぶ手にはやあふれてはひびのちりたり
ゆるゆると零度の宙そらを来しひかり気圏に散りてあをのそらなす
風おるる空の青こそ冷たかれかきし梢に日の散りけらむ
茜さすゆふべの風のつめたきが貫ぬきたる穴をながめてをりぬ
よにかけてみつるを俟たぬ弓張のつきのあかきもみには冷たし
身のうちに光電素子に似たるあり光受けなば呪ひ放たむ

新しきブルー

六廻めれう

春がいっぱい

山上秋恵

また雪に埋もれてしまふブルドーザそれを救いにブルドーザ行く
水色のマスクは少し嬉しくて色の濃いほう表につける
紺碧の中に碧を見るときも碧はなおもアオと呼ばれる
乗客が降りてくるとき前駅と前々駅の匂いからまる
この景色どうぞご覧と言うように遮光幕などない窓ガラス
青ペンのインクが切れるそのたびに軸とグリップ、バネも棄ててる
街中がアクリル板で覆われて怪しいものの影に気づける
雑踏はいたく寂しい一人なら鼻歌なども歌えるものを

西日がさしているあいだだけ

八重森かもめ

四つの季

山川仁帆

キャラメルがゆつくり溶けていく内にあなたの声を忘れてしまふ
糸状の雲を辿ればなんかい感じの空に届くだろうか
自転する地球のせいだいつまでもサランラップを上手く切れない
夕方の部屋でホツキヨクグマが乗る氷がゆるりゆるり溶けてく
ストーブが暖まらない曖昧な温度のままでラーメンを食う
今日は陽がちゃんと出ていた日記にはすんごく優しい句読点を、置く
生きているわたしはわたしのことが好き西日がさしているあいだだけ
コーヒーに沈むシユガーよ天国でポーションミルクとお幸せに。

足を踏み入れたら二度と戻れない森はこの地の晩秋に在る
秋深く火の手はあがりそのなかを歩むひとつの背を見ていつ
音もなく壊れしドライフラワーを拾いあつめる白き息の夜
銀色の蛇口こぼる一滴はどこを旅してきたのだろうか
四つの季を名付けしひとよ 時間を経て わたしも青き波音を聴く
この春、と云うとき風は展かれて胸をわたりぬ山谷めぐりぬ
葉洩れ日は膚はだえの上にひかりから生れしレースの模様のごとく
どこまでを夏と呼ぶのか サンダルと取り残された約束ひとつ

君が編んだマフラーべるべる巻きにして（嘘なんだけど）めちゃくちゃ褒める
キスのときフェイントかけるひな鳥のような顔した君をみたくて
甘栗をむくスピードがおんじで前世はきっと双子のぼくら
注がれた紅茶を派手にぶちまけるこんなときでも神様は留守
イヤフォンは小さな天使 寄り添つてやさしい歌を聴かせてくれる
心臓が野薔薇のとげで痛むのは恋がはじまるサインでしょうか
なつかしい数かぎりない歌がありいつか超えたい言葉があつた
図書室で眠つてしまふ読みかけの穂村弘に取り囮まれて

真っ白な空

みがかそま

感謝の二二二

宮嶋いつく

(やさしさ) がナイフになると知つたから僕は立ち去る光のない眼
エーミールは破れた蝶を貼り戻すポケットの中はスマホが一つ
「この作品はご視聴できません」すでにもう五十音順のロツクンロール
笑う時口とマスクの間にはわずかに隙間ができる憂鬱
問題1あなたの性格なんですか円周率は4だとします
影文字のフォントは静かに整列しあなたの光はどこからくるの
カーテンは窓から世界に吸い込まれ風は断片的に目に写る
真っ白な空を舞う鳥の群泳に目をやるように生きていること

（やさしさ）がナイフになると知つたから僕は立ち去る光のない眼
エーミールは破れた蝶を貼り戻すポケットの中はスマホが一つ
「この作品はご視聴できません」すでにもう五十音順のロツクンロール
笑う時口とマスクの間にはわずかに隙間ができる憂鬱
問題1あなたの性格なんですか円周率は4だとします
影文字のフォントは静かに整列しあなたの光はどこからくるの
カーテンは窓から世界に吸い込まれ風は断片的に目に写る
真っ白な空を舞う鳥の群泳に目をやるように生きていること

一点の濁りもなき

深影コトハ

地下一階管理室

虫武一俊

こんなにもまとわりつぐのにさよならは清音またいつかねも清音
太腿のほくろに触れるいつの日も若さをうまく使えなかつた
燃やされた制服 記憶にある闇は正体もなく美しかつた
遠泳の果てにあなたはイカロスのエクスターを語つてしまふ
幸せに眠るお腹に初雪のように積もつてゆく口キソニン
こめかみにキスをくれたねいつか撃つための印のようにあなたは
笛ラムネ 吸つても吐いても音は鳴り私は寂しい大人になつた
一点の曇りなき日に放たれてしまつたひかりとして生きてゆく

七十二歳大ベテランが勇退しその後任として駆け回る
大企業の末端会社にふさわしく支給のベルトたぶん三〇〇円
都心回帰つてこれからよ真夜中に立ちショーンされているオフィスビル
段ボール、箱のかたちを持ったまま捨てられて子猫はいない
気にかけつつしかも悪路を行くことのどうしても余裕なんてなくなる
底の底らしさが深くなる冬よ吐息をかけた爪は明るい
地下鉄の音がかすかに聞こえる中央管理室の午後九時
ほんとうにオフィスグリコが職場にも家にもなくて助かっている

やさしいひと

島崎みとん

カンナ

西鎮

友達をひとりなくした帰り道恋人になつた東武線沿い
変わつたのはお互い丸くなつたこと変わらないのは好きだつたこと
空腹も眠気も顔に出ちやう人嫉妬も好きも全部出る人
探し物は諦めたころに見つかって一人を繋ぐ金色の闇
「寂しいと病むのは普通」と励まして無理しないこと教えてくれる
沈黙が苦じやないどころかお互いに作業をしだすサバサバの仲
手土産のドーナツの味迷わない7年の縁伊達ではないから
右腕のマッサージからはじまつて「今日なにするかあ」日曜の朝

泣きそうな目をした雪だるまばかり子は作りおり別れも知らず
ポケットにちさき化石を忍ばせて時々さわるから生きられる
不揃いのマグカップまた温めてコーヒーを待つときの静けさ
余熱だけで鶏胸肉はほぐされてあわない今まで春が来ること
ベッドから雪をみていたその肌を黄金比だけ僕にさらして
冬薔薇の棘にふれては融けてゆくあわ雪だけをみてみを待つ
ピスタチオの殻を碎いて如月の欠けたぶんだけ春へ向かおう
カンナ、いま生きていたなら二十五のきみを思つて選ぶ花だよ

会いましょう

嶋田さくうこ

ピアノ

雀來豆

幸せと聞かれるならばしあわせと答えるでしようランチタイムは
いく度か問う問われるを繰り返し午後のコメダのぬるいコーヒー
十年をきみと過ごして春に死ぬそういう生まれ変わりをしたい
北海道はいいところだねあんなにもアスパラガスを空に伸ばして
食パンの耳が好きです話すとき少し目を伏せる人が好きです
唇に触れつつ話すきさらぎのリップクリーム塗り足りない
そう言えば髪があつたなもう二度と会わない人を夜に沈める
会いましょう、いつかあなたと見た空とキットカットがあればうれしい

目覚めるととりあえず水その水を求めてこうして舟に乗つている
黒鍵の鱗をたどれば届くだらうかピアノのなかのやわらかい場所
瞿粟ひそやかに咲くぼくたちが夜だつて思いこんで寝ている屋間に
ドラマーが歌手を兼ねるからつくり返すピアノマンの暗い口腔
図書室の奥には遠つ国ありてかすかに柘榴の花の匂いす
春の歌いさな指の練習はピアノのいちばん高い音から
いつもても留守だつたのだと言いたげな老調律师の白い口髭
雪道で転がり落ちる鞄から古い楽譜をひらひらさせて

ねむりの果てに

章生

別れの春に

水面狼

玉葱の芯のあたりに丸まつて生まれてきそうなわたしの呼吸
発酵するヨーグルト生きているこんなにも水をはきだしながら

鳴り止まぬ踏切の鐘 セミたちの声に重なる夏の終わりを
もう雨が：だからといつてこの夜の花の香りを走るしかない

沈むにも浮くにも月が泣いているようにも見えて月、赤い月
くれないの花びら散らしゆくように夕陽は光を失くしていった

どこまでも深く深くとゆくときのねむりの果てにある柔きもの
手品師は帽子をとつてお辞儀してスカーフひとつりわたしを消した

くれないの花びら散らしゆくように夕陽は光を失くしていった

どこまでも深く深くとゆくときのねむりの果てにある柔きもの
手品師は帽子をとつてお辞儀してスカーフひとつりわたしを消した

冬の鉄道

城山桜

立春

鈴木智子

みちみちと詰め込まれたる乗客は蕭々々と石炭になる

混み合つた朝の狛犬ポジションで抱っこ紐から「阿」の口のぞく
忘らるるビニール傘の幽霊が座席の端にいてもいいのに

この風はいつか止むのを知つて通電車をやり過ごす猫
扉から春の兆しが乗り込んでくしゃみを誘い出そうと囁る

最寄り駅ひとつ手前が終点の普通電車を揺らして
電車に乗りそびれたる背中からリュックの鮫が牙をむき出す

冴ゆる夜をあやす列車の音を聞き子らの瞼は緩みて落ちる

さてここからが本題です。立春の頃にほぐれる本音を抱いて
立夏より丸いかたちの心地して立春は来る 両手で受ける
君の言うれもんはきっと甘くつて爆弾になんかなりやしないよ

本当に正しいものがあるのかな星を描くときゆらぐ黄の色
虹と言う概念を知る（あれはひかり）ランギンカマンという名のひかり
かんたんに覚えた祈りを冗談で連呼している そんなものかな
こんなにも日々は穏やかだとしても錨を下ろす場所はまだない

一面の菜の花畑に出逢うとき思わずわたしは帽子を脱いだ

春空

松本ユミ

Re:born

三浦くもり

先生！先生！追う背のあるうれしさよ桃ほろほろとほころんで春
カーテンの向こうに揺れる五限目の空どこまでもどこまでも遠い
今日もこないあの子の机にどつちやりとバレー部の重いセカンドバッグ
練り消しをこね回している50分チャイムが鳴る前に片付ける

同好会と名付けるなにか だらだらと意味なく集うことが愛しい
バッテラとシベリアをたぶん間違えてしまつているが続ける会話
実際に頭は重い首と手と両方使つて持ち上げる脳
目を瞑る人から午後に溶けていく教科書の中でたどる音程

もーにんもーにん

御糸さち

君とのくうし

三浦なつ

カーテンをカラツと開けて今日もまたきみを迎えていくよ、もーにん
ねえもーにんこつちを向いてさつきまで見ていた夢の話をしよう

何度も朝はうれしいあいうえおレタスをちぎる音のきらきら
目玉焼きつくろう目玉がつぶれたらスクランブルエッグのはじまりだ

月・火・水・炭・水・化・物 時としてざらりと焦げてしまつトースト
インスタント☆コーン☆ポタージュ！スープーンがくるくる描き出す魔法陣

食卓に白いお皿は冴え渡りもーにんもーにん僕の朝だよ
ほんとうはいますぐにでもおふとんにもどつてすべてわすれてねたい

砂浜を裸足になつてゆくときのようにはじめる君とのくらし
「ルツコラ」とあなたが言えばテーブルにひと足早く春の風のふく

この部屋で愛はときどき揺らぐけど電波時計はいつでも確か
拭つても拭つてもすぐ降り積もる埃あなたの嘘がすきです

自販機にコインの落ちる音のして取り戻せないものがあること
早朝のシンクの中で割れている皿の静かに告げる絶望

大人だしもう戻せないものもあるサクマドロップスの薄荷味とか
もうジャムの記憶をなくして空き瓶はやさしくひかりを受け入れている

愛してない

まきぞの

今日は負けない

まさけ

売り切れの光に小銭を入れたあと気づいてこれは失恋でした
仕方なく買ったココアに手袋をなくした指を温められる
てぶくろを手袋と書くたやすさで恋人同士と名乗っていたね
かなしいのではなくつらいのでもなくただ揚げ物を作らなくなる
いつもなら電話がかかるてくる頃でくる頃だけ電話はこない
鼻歌が引き算されたこの部屋は秒針音がやけにうるさい
何もかも残さず家を出たきみの苺のジャムがずっと冷えている
間に合うと思った わたしだってまだあなたのこと愛していない

まきぞの

さんぶりんぐ

まこ

One for the money, Two for the show. ぶかぶかの王冠を脱ぐ夜のイメージ
これは毒殺 発芽とともに体内を侵されていくきみの告白
晴れたから、が口癖だつたワンピース まだ美味しくはない缶ビール
ビニールの夜に揺られて躊躇ばかりみとのfuckも恋愛のパロディ
その嘘は煙草の先の火のようで苦いひかりで、バカばつかだ全く
永遠なんて丁寧に言えば 底辺に垂直二等分線の朝
恒星の個性がひかりだ 後世の僕らに晩夏の叫びはとどく
きみの手に触れないでいた日のような、燃やす金より高い花束

眼差し

真島朱火

ばあちゃんがパヴァロッティをかけるたびアパートに吹くイタリアの風
飛行機に乗るはずだった 体操も泳ぎもできる祖父の白い歯
何もかも白く染まつた病室に大好きだったガーベラを挿す
上書きをしてはいけない思い出があるから今も買えないサイダー
旅先の家族を写すスナップのどれもに宿る祖父の眼差し
制服を着てるわたしを知らないで死んじやうなんて若すぎたよね
合格の報告なんかしなくても全部分かっているような風
なんとなくうまくいく日は人知れず祖父が空から降りてきている

ジグソーパズル

鈴原ゆり

朝の夕暮れ

セサミスペースM

好きな絵を初めに探すおとうとと四隅をそつと分けておく兄
真剣な表情で持つひとピース小さな指は汗ばんだまま
糸のこで初めて作った木のパズルやすりが甘くてささるすいぱり
ダンボールハウスからによきつと並ぶ足静寂また話し声
ご飯の時間を知らせるのも躊躇うほど時を忘れたハウスの住人
貴方とも共有したいこの時間このままでつと續けばいいのに
片付け出したまんまのあのパズル分かつてくれる貴方でよかつた
ハウスの中気づけばそこに置き手紙父と子供はパズルで繋がる

この春

諫訪灯

ある夜

千仗千紘

子を抱いた重みは腕と骨盤も覚えていると夢で知る朝
山並みがぼんやり見える日が増えて遠ざかっていく冬の足音
初耳のさえずりを聞く この街を鳥たちはまだ見捨てずにいる
スギナへと近づいていく土筆たち今朝もホームで観察している
ほこんだ花を愛でてく通行人空き家の春も誰かのために
蜜だけを吸わればと落とされた花を拾つて帰る夕ぐれ
野菜からにじむ苦味をおいしいと感じるほどに歳を重ねて
どこででもマスクが買える「当たり前」戻してくれた誰かを思う

晴天にグレーのスーツで駆け込んで曇の仲間になる練馬駅
お土産の饅頭みたいな車内にて吐くため息は黒餡の色
いつもより背筋を伸ばし自販機の一番上のコーヒーを買う
デスクにて口に含んだコーヒーはいつもと違う華やかな味
昇りゆく日を一瞥し読むレジュメ脇に記した「今日は負けない」

執拗な光の波状攻撃を耐えて這い出す綿毛の世界
晴天にグレーのスーツで駆け込んで曇の仲間になる練馬駅
お土産の饅頭みたいな車内にて吐くため息は黒餡の色

いつもより背筋を伸ばし自販機の一番上のコーヒーを買う

デスクにて口に含んだコーヒーはいつもと違う華やかな味

昇りゆく日を一瞥し読むレジュメ脇に記した「今日は負けない」

手と手

草流

クラシック・アップまで

たえなかすず

お互いに手を動かして会話する初めて伝える私の名前
じっと見る私が動かす手と口を初めて会った友だちだから
「ここにちは」これでいいのか不安気に手を動かして挨拶をする
手と手をね動かしたなら歌だつて歌えるんだよと聲喉の友は
ステージでみんなで歌うSMAPの歌手を動かして口動かして
友は言う恥ずかしがら大膽に下手でもいいよきっと伝わる
そのうちに手話を忘れるかも知れぬそれでも私はずつと友だち
久しぶり会う友と手話をおどおどとも大きく口を動かしている

お互いに手を動かして会話する初めて伝える私の名前
じっと見る私が動かす手と口を初めて会った友だちだから
「ここにちは」これでいいのか不安気に手を動かして挨拶をする
手と手をね動かしたなら歌だつて歌えるんだよと聲喉の友は
ステージでみんなで歌うSMAPの歌手を動かして口動かして
友は言う恥ずかしがら大膽に下手でもいいよきっと伝わる
そのうちに手話を忘れるかも知れぬそれでも私はずつと友だち
久しぶり会う友と手話をおどおどとも大きく口を動かしている

湛ふる露

蒼音

月あかりなべて眩しく輪郭がわからぬやうにこの手に抱きつ
てのひらが乳房覆ひてゆびさきは我を離るる生きものとなり
舌先が唇の淵へと触れにしにあまねきこゑをきみはうしなふ
舌と舌の絡みあひたる泥濘にもはや見えざる理性のあるや
おたがひの胸とむねとが擦れあひふたりの汗が肌に混じりぬ
幾重にも重なる襞を貫きて滾るおもひは溢れてしまふ
しのめになづきの重み確かに鳥の影さへ届かぬ部屋で
雪椿ぱつりと落ちてあさかげは湛ふる露を照らしてをりぬ

復活祭

多香子

さよならと白いこぶしの花が散るふたり出会った教会の庭
山折りと谷折り何度もくりかえしあなたに飛ばす春の折り鶴
赤い実を食べてもふたりそむきあう言葉持たない鳥よりも寒く
ひつそりと月の桂の芽は伸びてさみしい兎の耳をなでゆく
ひとり飲むワインのロゼの薔薇色の夜の寂しさいやましてゆく
思い出はミント色してうすくまり忘れないでの声だけとなる
復活の願いに卵の色を塗るカーテンの向こうは春の雨降る
鳥になりまた猫になり春の日を過ぎていきた明日は来るよ

蟻みたい

藤田美香

引き出しの手紙

かうみうり

町内の掲示板に「献血のお願い」が貼られ有休を取る
待つあいだコーヒー牛乳渡されてカロリーメイトも食べさせられて
お名前を言つてください 誰だつけ今わたし誰の役なんだつけ
右手から献血しますねいいですか／いいですよって両手を差し出す
墓場まで持つていきたいことがあり兎にも角にも血は赤いのだ
献血のお礼にもらった歯磨き粉とサランラップが少しはすかしい
蟻みたい やわざわ並んで買う人らビジュアル重視のいちご大福
自転車でゆっくり遠回りして帰る虹ひとつない空を見上げる

新月の歌集の頁が冷たくて水の中へと入っていくよう
ストーブがごーごー鳴いて騒いでてわたし右頬明るくさせて
開けることためらつて引いた引き出しの中で便箋息づいていた
手紙にも締め切りがある投函は明日を過ぎれば葉っぱに戻る
途切れないとたびに脱いだりまた着たりしたくないから汗は許そう
カフェにて雜音ずっと聞いている誰でもないが居心地よくて
人々がそれぞれ違う目的で渡る信号わたしも渡る
北風は出さずじまいの封筒を生み出し昨日へ逃げていった

雨が、やみますように

藤森岬

コートを脱いで

古井久茂

すきだつて伝えられずにさくら散り雨ばかり降る春のまぶたに
のど飴とマスクは手切れ金ですか振り返らない雨のたそがれ
降りやまぬ雨に名前をつけたくてぼそぼそ声で呟いた夜
雨音に似てる名前のくすりだよ眠れぬ夜に飲んでごらんよ
眠れずに爪先だけで足元のちいさき猫のぬくもり探る
雨音と混じりあつてる猫の息てのひらつたうおやすみ、さあ
ぎんいろは明け方に降る雨の色ひかり射す日をただ待ちわびる
欲しいのは泣いている子の手に乗せる柘榴色したちいさなひかり

レトルトのカレーを買って来ないなら明日の夜は雨が降ります
シェアしよう 部屋もコートも夕飯もハンドオイルも記憶もすべて
乗り換えたたびに脱いだりまた着たりしたくないから汗は許そう
側面が錆びてデコボコ煙製器 風で倒れて前もデコボコ
食堂の換気扇から出る湯気を浴びる桜は咲いたでしょうか
足元にすり寄る猫を避けたのに裾に残った灰色の毛
優しさはすべて捨てたという人に少し汗ばむ体温があり
少しだけ迷った末にストーブを片付けた日はやっぱり冷える

頂に昇る太陽 夜勤者の朝にこだまする目覚ましの音
荒鶯が羽ばたくように まばたきが新しい街を見せる雨あがり

駆け抜ける奥の細道 うちのカレー2ブロック分遠くに香る
ありふれた兄弟喧嘩のその末に 電気椅子神が涙流す

銀箱に紙切れ入れた金太郎 そつか国家は僕だつたんだ

とこしえに背負う重荷は寄越しなど 赤い横縞のオニヤンマ飛ぶ
目白啼くまたつつがなく冬は去る 靴を履き替え走る春風
慎重に間違えないよう繰り返す 君に雷落とすまじない

ゆめうつつ

平井 まどか

きみが指折り数えてるその指の果ての日付で待ちたかつたよ
この漢字じゃないイメージだつたつて名前を呼ばれたのが初恋
誰とも仲良くなれるタイプとは仲良くなれないタイプのわたし
方言の抜けたあなたがそのことに気づかず話す今の生活
「今もまだ出来るかな」つて逆上がりして逆さまになつた校庭
コードからコードへ移りゆく指に選ばれない場所の弦が鳴く
声を見て形を聴いて目を喰いで心を食べていたらもう朝
まだここにあなたが居ると仮定して2杯分淹れてもいいですか

かばん

たかはしりおこ

螢光灯、チカチカうるさいから消して。 その足首にミサンガを見る
指先で氷が水になつていくようにあなたが笑うと熱い
コンタクトレンズ外せば輪郭のぼやけたわたしだけ生き残る
Tシャツにひかる二の腕帆を揚げてきみはこの町からいなくなる
どこまでも行ける荷物を詰めるにはわたしのかばんはだいぶちいさい
ほどかれた髪結いなおす指先に残る火照りも次第にさめて
常識のない人になりきみという本ためらわず破いてみたい
神様は信じないけどきみと見る青く塗られた海が綺麗だ

命の萌し

瀧口 美和

ジャムおじさん暗殺指令

田中 翠香

薄青き空に抱かれているようなカーディガンから春の手触り
膝下で挨拶してくるスカートと名前も知らぬ路肩の花が
ふと香る風が孕んだ新しい命の萌し東へ向かう
清き明き心を込めて投げ返す迷子になつた野球ボールを
ブランコの鎖が少しあたたかいゆずつてくれたあの子のぬくみ
自我芽生え根を張る前に駆けてゆけ子らよ薄青き空に抱かれて
帰り道まだ明るいね明るいとなんでもできる気がしてくるね
凜とした大気に伸ばす両腕の蓄今日からほこんでいく

春にはハッピーエンドで

福山 桃歌

あたらしい季節はめぐり終わりなら何度も越えてきたよぼくらは
大声で名前を呼んできみにしか出せない音で訛りをなぞつて
少しずつしか進まないすごろくでゆっくりハッピーエンドを目指す
輪郭がぼんやりと春 桃色のアウトラインが似合う笑顔だ
きみの角生え変わらないでねちょっと歪んでるのがいとおしいから
波になつてさらつてほしい足元を優しく撫でるざらざらの嘘
ありえないことばかりある泣いているきみの右手に知らない傷痕
はみ出した色がきれいはどうしたらぼくらは分かり合えるのだろう

秘密のおはなしアワード

竹林ミ來

この星の副音声が聞きたくて月をくるくる裏向きにする
切り分ける前の記憶がちよつとだけあると語った苺のケーキ
教科書のザビエルたちの間では落書きされてないやつはザコ
かゆいところはないですか はい でも少し 恥ずかしい過去は少しもある
四色に分かれたピザの境界を通過するのに賄賂を渡す
持ち主のところに戻りたくないと泣き声のする落とし物箱
セキュリティ面からすれば黒鍵に住みたいですとピアノに頼む
ロックダウンしていますから外出はしないでください鬼もだめです

「ゴルゴへとばいきんまんは依頼する「指定口座に振り込みました」「わかった。やつてみよう」ゴルゴはそつと言ひ放ち葉巻を捨てる夜の立川
ズギューネーーーーン……ジャムおじさんは口を開け天をにらんで地へと崩れる
「許さないっ……」アンパンマンは劇画風の顔へと変わり誓う復讐
アンパンマン号にロケットエンジンを積みしバタコも復讐の鬼
絶対に放送できぬ罵倒語を放ちチーズは扉蹴破る
懸命に命乞いするばいきんまんをせせら笑いしアンパンマンは
そのすべて見届けていたドキンちゃん報復の連鎖ここに始まる

静寂のダンス0時を回つても終わらないあなたが眠るまで
ああ今日も誰も死なずに終われそう微かに上下する羽布団
もし仮にポケモンマスターだったなら「うたう」で寝かしつけ余裕だなあ
祖父祖母に抱かれず育つ乳飲み子の健やかなれと飾る人形
頭隠さずおしり隠さずそこにいる完全にいる迫真の「ばあー！」
タオルから逃げた野生のアカチャンは寝室方面へ向かつた模様
我うたう赤ちゃん眠る我こそが「うたう」覚えしポケモンである
しあわせがついに歩いて一步ずつ転けながら一步ずつ近づく

タオルから逃げた野生のアカチャンは寝室方面へ向かつた模様
我うたう赤ちゃん眠る我こそが「うたう」覚えしポケモンである
しあわせがついに歩いて一步ずつ転けながら一步ずつ近づく

社会星人

田斗 かき

髪を剃り過ぎたとわかる傷口に赤い手指でようやく気づく
いやこれは善行だとは思わないが点字ロックの雪を蹴りゆく
この道に花屋はあつたかずいぶんと登校下校をしていないから
愛嬌も在庫があるのでイヤホンで眉間のシワを目元へ移す

「おれ」はない「わたし」も「ボク」も違うな、と一先ず羽織った「自分の」のパークー
無が滑る最終電車の車窓など、俯瞰して見れば映る酔っぱらい
舌に残る冷めたブラックコーヒーを置き去るよう飲むミルクセーキ
粘土製の顔ならない困つたら少しひねって花を活けよう

一生分の海

茅野

「あおい」って言うと「碧い」と言う君と少し違った青を見ている
「地平線みたい」と言うと「海だから水平線」と訂正される

右後部座席のドアが開かないクリーム色の君の中古車
どこへでも行けると思う一眼レフカメラで空を切り取る君は
また靴に砂が入ったふりをして時間を止めてしまいたかった
靴紐を結ぶ間も本当は振り返らずに進んでほしい
君と見た一生分の海をいま雲の速さで消化している

前を行く君の視線は不確かな爪先で確かな光になつた

Pray

箱岡亮太

境界

濱松哲朗

手に滲む明日の無力と無氣力としまいそびれたささくれた指
隠された口の裏側に飼うなか食べていいのにしようぱい感じ
苦しみと名前はつくが遠くて吐く息はどこへ？集まっていく
あいつとそいつとあの人と会つた。そして会つたことのない誰かが
寒さとは風につきまとつものでもなくてしそびれちやつたこともかなしき
君がため残された歌につきまとう紫煙公園には常夜灯
黄昏が溢れだしてくる今にも余裕の先に行つたと祈る
雨が降る予報はハズレ火をつけるもう使えそうもないライターで
ピングベージュのトレントコートひるがえる春のたよりは五分遅れで

季節の色（うたの日一月・二月まとめ）

薄荷。

B館一階生活指導室

春陽

沈みゆく陽の暖かさじわじわとチョコレート色に染まる歩道橋
星空と同じ色したマフラーにあなたの喉が守られている
真っ白なニットコートの隙間からどうしようもなく漏れ出るひかり
ネイビーの宇宙模様のスカートで街を歩けば夜がはじまる
真っ青に雪の公園染めあげてガラスのように月は冷たい
オムレツのほっくり焼けた白い湯気満ちて我が家に朝の訪れ
さみどりの四角く切られたレタスまでドレッシングが届いていない
ピンクベージュのトレントコートひるがえる春のたよりは五分遅れで

青春を濃縮還元したようなプレイリストを爆音で聴く

ジーンって遺伝子のほうだったのね。feel my soulの意訳じゃないのね
好きだった娘の待ち受けがCHERRYの歌詞画でメル画でした。それだけ。

Rolling star をBGMにして眺めています、ピタゴラ装置

イヤフォンの片方だけが流してくる Good-bye days 右の断線

GLORIAはいつか聴いた曲 ああそうだよ 進研ゼミで聴いたところだ
ぼくの心があなたの声にささやわれるSUMMER SONG しっかり溺れる
懐かしい痛み、87hanage いたいのいたいのとんでもないで

ビスケット・ソング

西村曜

死なないで生きるすべなくポーションのミルクをすべて向日葵にやる
いま僕が精緻に生きていることも神のビスケットの食べこぼし
ポケットをたなければ割れるビスケットその痛みにはもう慣れました
とこしきえ、とだれかが口にするたびに向かいのジョンが吠えるシステム
手をうつてむすんでひらいで無駄だつてあなたがやめたおこないを見せて
感傷の傷とはきっと擦過傷うすいガーゼをあてて癒せる
手みやげにケーキを買って帰るとき信号ぜんぶ青だったんだ
ポケットを裏返したらビスケットのかすが出てきて、おやすみなさい

わざくれ

千原こはぎ

たぶん夜のせい あなたが引き出してしまったわたしのパンドラの箱
ありとあらゆる手を試みる深夜二時 自分の機嫌は自分で直す
いいの気にしないで平気大丈夫 何の効果もない壁を置く
完璧なあなたのせいでわざくれの多いわたしはまたわざくれる
ひらいてはいけない箱のいくつかを仕舞い込む胃の奥の混沌
他人には見せない弱き汚さの包みを解きたがる熱い声
拗らせた劣等感を吐き出せばいつものようになまやかすひと
まるで手のひらに撫でられているみたいあなたの声の海に眠れば

舌を這わせる

chari

涙がキラリ（前編）

月丘ナイル

交差路に止まれの標識ばかりあり立ち尽くせ立ち尽くせ 夕焼け
淋しさが死因でじょうか手のひらに横たう割れたスマートフォンの
手の平じや掬えないつて分かつてた水面の月を見つめる君を
冬陽射しカップ擦りぬけストローを光と影のふたつに割りぬ
「悪口を言っていたよ」囁いた友の舌先かるく弾んで
Modal Jazz 散らばるスタバにてマグの白き人魚に舌を這わせる
あの夜に君の眼鏡を外せたら跳べただろうか異なる今日へ
咳ひとつ僕から離れ雪となり君の寝息に解かれていく

春の雨

月岡鳥情

人が死ぬときの瞳の色をして月がすべての夜を見てゐる
きのふはじめて遭つた男が耳元でふるさとの海の音を囁く
ひとびとがまた一斉に虹を指す黒く引き絞られた傘にて
水中花そして少年、揺れながらともに裡から腐りはじめる
まるで時がこの世界から落ちてくる悲しみの手触りを確かめてゐる
夜のたびに母の懺悔を聞いてきた百合と花瓶の水が腐れる
卵黄が白い便器を汚したらいつまでも春に終はりが来ない
春の雨の記憶のふちに寄りかかり眠る あなたを舟と信じて

今はもうない

野添まゆ子

君の背へかける言葉の見つからず手だけを振った私を悔やむ
少しだけ低めの声が好きでした もう呼ばれない名を書いてみる
限界へ挑む小指の深爪は赤い糸には頼らぬ決意
理由づけしたい涙のあるときは私のアップデートをやめる
ミッションをクリアするごと消してゆく写真に真夏だけが足りない
口紅を変えない訳が欲しいから「なりたい顔」へ投票に行く
もう消せぬ記念日の文字フリクションなら良かつたと今さら思う
がんこちゃんみたいなピンクのマニキュアを買ったセリアは今はもうない

いろいろと才能がない卒検は二回落ちたしバス酔いするし
いろいろと実力がない自動車に乗れないゴールド免許で図書館
いろいろと遊びに行きたい走りたい自転車で行く虫がぶつかる
いろいろと虫がぶつかる目に入る涙でにじむ縁石にぶつかる
いろいろとかごが空っぽかぶとむしはなびらはっぱとびこんでくる
いろいろと渋滞している自動車を百台追い抜く（それは盛りすぎ）
いろいろと細かいことが気になつてこれは追い抜き追い越しじゃない

物の怪の居場所もあつた街灯のまだない頃の蒼い暮れ六つ
芝居小屋探す乙女を送りつつネタばらしする送り狼

ヒトと魔の境おぼろな頃は皆麻の衣と説く国夫翁

昭和との結界に置き去りのまますつと黒電話が鳴りっぱなし

終電ののっぺらぼうが多すぎて過去の自分が見分けられない

付喪神例えは薬飲み過ぎて鱗の入った硝子瓶われ

一人居てヒトのかたちを思い出す為の「北斎漫画」の手ずれ

百鬼夜行絵巻を不意に終わらせる全てが溶けたまつ白な朝

夕焼け色の

道券はな

感情が結露していくあなたからただよう雨の匂いを嗅いで
前髪をふるわせるのは東山魁夷の森に吹くような風

言いさした言葉の次を待っている余熱で黄身をかためるように

早春の鮮魚売り場で空を搔く大車海老のあおじろいあし

雨粒の影があなたに降りかかる窓際で頬杖をつく手に

雨の夜の鍋に静かに煮えていく海のいのちと陸のいのちと

親指の爪ほど残るコチュジャンを排水口に逃がしてやつた

雪残る故郷のことを言いながら夕焼け色の酒を飲むひと

どつくん

遠山文

牛乳を飲み干しコップに残る膜のように白い無罪が欲しい
縞々の大きなパンツ洗つてる鬼の半けつ撫でる潮風

A-1に座つて海のシーンごとラップ音たて泣いているひと

贋物が蔓延る街を抜け出した茂みで見つけたらいおんハート

ケンタッキーフライドチキンの匂いする負けそなうなまま降りる

可燃性少女を頂く店先で優しい君は取り上げる すぐ

氷上のプラの容器にどつくんとお買い得なる鮫の心臓

ほらここで小豆を煮ようよ甘くつて熱い地獄と一緒に見ようよ

くろわさん、委員長になる

ともえ夕夏

生徒会室は四階 窓からは祖母の家まで見えると知った
長と名のつくものに初めてなつて前後左右がすべてあたらし
何回も差し戻される計画書に消しゴムの跡の薄汚さ
できなくて泣く本当は慰めてほしいと知つて恥ずかしくて泣く
重責がつらくてみんな一回は泣くもんだつて母は笑つた
おなじだけ生きたはず生徒会長の制服の袖口摩れている
あの子たち平気な顔で先生の理不尽と鬭つてすごい
ヨルシカを口ずさむ図書委員長と帰る ねえねえあんたも泣いた?

せんぱい、

夏本橙

先輩は（何回目かのこの感情とか）いろいろと教えてくれる
1枚の資料をふたりで覗きこみ隅から隅まで読んでいる、ふり
活発な意見交換とか無意味たつたひとりの声を聞きたい
ひとつひとつ消えてくタスク 每日のようにつもつていくこの想い
遅くまでお疲れさまとなでられてわたし当分髪を切れない
名字より名前にちやんがほしくつていつかはちゃんを捨ててほしくて
ごめんなさい嘘つきました本当は「すてきです」には「て」がいません
後輩じゃなくなるためにひとまずは仕事をしなきや後輩でいなきや

逆さに置いて

中村成志

葉ものがたり

にう

パスワード忘れるばかりこの指がはぐれるような冷たい風に
けんけんば 腿へとかかる体重に笑みつつ道の落書きを跳ぶ
赤土のざるざる滑る土手を降り土器と磁器との違いを思う
あおあおときやべつまるごとまな板へ置けばどうしてくれよう夕陽
カーテンが本日最後の陽光を吸い込み終えて膝のさむさよ
切つ先を無くした針が血管へ降り積もってゆくような震えだ
銀鮭の紅の脂が滲みゆくクリームシチューまだゆくな冬
ひと部屋で世界が余るときもあるスノードームを逆さに置いて

雨音が響く本屋の店内で脳内ドラマのヒロインとなる
この世界たつたひとつ物語うむ苦しみをこえた喜び
ざあざあと止まない雨の帰り道はお気に入りのレインブーツで
空見上げ虹を見つけた瞬間の瞳はきっと七色だろう
いつもより早く起きた朝くらいフレンチトースト焼いてやろうか
職場にて星の数ほど余剰した葉を二枚そつと手に取る
幸せを引き出すための切符だと本のページに葉を挟む
願い事叶えて消える星よりもただ空にある星でありたい